

ノステル・プライオリの図書室テーブルと豎琴の肘掛椅子

英国家具史研究 (2)

The Nostell Priory Library Table and Lyre-back Armchairs:

A Study Series on English Furniture History Part 2

新井 竜 治

Michael Ryuji Arai

要約

2004 年 8 月、英国ナショナル・トラストが保全管理をするウエスト・ヨークシャー、ノステル・プライオリの図書室テーブルと豎琴の肘掛椅子などの細部写真撮影、スケッチ、実測を行った。本稿はその実地調査および文献調査をまとめたものである。この図書室テーブルはウエスト・ヨークシャー、オトレイ (Otley) 出身のロンドン家具職人トーマス・チッペンデール (Thomas Chippendale, the Elder) 工房において 1766 年末にはすでに完成し、1767 年 6 月 30 日に発送され、第 5 代サー・ローランド・ウィン准男爵 (Sir Rowland Winn, 5th Bt) のカントリーハウスであるノステル・プライオリの図書室に納品されたものである。また豎琴の肘掛椅子は 1768 年 1 月 20 日に発送され、納品されたものである。この図書室のインテリアはロバートとジェームス・アダム兄弟によって設計されたが、家具はチッペンデール自身がデザインしたと考えられている。

本稿では、ノステル・プライオリの図書室テーブルと豎琴の肘掛椅子という一連の家具作品を通して、依頼主、デザイナー・家具職人、現存する往復書簡・納品明細書・請求書・肖像画という家具にまつわる背景、施されている装飾モチーフ、使用されている材料や適用された製作技術、建築自体がロココ様式から新古典様式に移行したことによる室内装飾と家具装飾との調和関係、他のカントリーハウスに現存する関連のある家具との比較などについて考察し、18 世紀中葉の英国家具産業界を取り巻く現実的な姿を探った。

キーワード：ノステル・プライオリ、トーマス・チッペンデール、ロココ様式、新古典様式、英国家具

目次

- I はじめに (Introduction)
- II 依頼主 (Client) : 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵 (Sir Rowland Winn, 5th Bt)
 - 1 ウィン家の歴史概略とノステル・プライオリ
 - 2 第4代サー・ローランド・ウィン准男爵とジェームズ・ペイン
 - 3 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵とロバート・アダム、ツッキ、ローズ
 - 4 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵とトーマス・チッペンデル
 - 1) ノステル・プライオリに納められたチッペンデル工房の家具デザイン
 - 2) セント・ジェームズズ・スクエア 11 番地とノステル・プライオリの家具
 - 3) 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵とチッペンデル工房との取引関係
 - (1) 1766 年から 1770 年
 - (2) 1771 年から 1772 年
 - (3) 1774 年から 1785 年
 - (4) ヘアウッド・ハウス (Harewood House) と工房との取引関係
 - (5) メルシャム・レ・ハッチ (Mersham Le Hatch) と工房との取引関係
 - 5 第4代・第5代・第6代セント・オズワルド男爵とナショナル・トラスト
- III デザイナー (Designer)・家具工房オーナー経営者 (Cabinet-maker & Entrepreneur) : トーマス・チッペンデル (Thomas Chippendale, the Elder and the Younger)
 - 1 トーマス・チッペンデル略歴 (初代 : 1718-79、2 代 : 1749-1822)
 - 2 紳士と箱物家具職人のための指導書 (The Gentleman & Cabinet-Maker's Director)
 - 3 家具デザインの変遷 (Furniture Design)
 - 4 家具ビジネスの規模と内容 (Furniture Enterprise)
 - 5 顧客・後援者 (Clients & Patrons)
- IV 図書室テーブルと豎琴の肘掛椅子に関する古文書の記録 (Archives)
 - 1 図書室テーブルに関する書簡、納品明細書の記述 (Letters & Accounts for the Library Table)
 - 2 肘掛椅子に関する書簡、納品明細書の記述 (Letters & Accounts for the Armchairs)
 - 3 図書室テーブルと肘掛椅子の価格 (Price)
 - 4 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵と令夫人の肖像画 (Conversation-piece)
- V 装飾モチーフ (Decorative Motifs)
 - 1 図書室テーブルの装飾モチーフ (Decorative Motifs applied for the Library Table)
 - 1) 先細柱脚 (ターム : Term)
 - 2) ライオンの顔と爪 (Lion's Mask & Paw)
 - 3) スクロール (渦形 : Scroll)

- 4) ハスク (Husk)
- 5) フェストゥーン (Festoon) / スワッグ (Swag)
- 6) 輪飾り (Wreath, Garland) とリボン (Ribbon)
- 7) アカンサス (Acanthus)
- 8) パテラ (Patera) / ロゼット (Rosette)
- 9) ギロシュ (Guilloche)
- 10) ロカイユ (Rocaille)
- 11) ビーズとリール (Bead and Reel)
- 2 肘掛椅子の装飾モチーフ (Decorative Motifs applied for the Lyre-back Armchairs)
 - 1) 豎琴 (Lyre)
 - 2) パテラ (Patera) / ロゼット (Rosette)
 - (1) 円形パテラ (Circular Patera)
 - (2) 楕円形パテラ (Oval Patera)
 - 3) ハスク (Husk)
 - 4) 雷文 (Greek Key Pattern, Fret)
 - 5) アンセミオン (Anthemion)
 - 6) 溝彫り (Fluting)
 - 7) アカンサス (Acanthus)
 - 8) 弓形トップレール (Bow-shaped top-rail)
 - 9) ローレルとビーズ (Laurel and Bead)
- 3 天井と壁の化粧漆喰装飾、造作書棚の装飾、置き家具の装飾の調和 (Coordination)

VI 材料と製作技術 (Materials and Techniques)

- 1 図書室テーブルの材料と製作技術
(Materials and Techniques applied for the Library Table)
 - 1) 木材：マホガニー (Mahogany)、オーク (Oak)
 - 2) 突起部材 (Mouldings) と彫刻 (Carvings)
 - 3) 突板張り (Veneering, Cross-banding)
 - 4) 接着剤 (Adhesives: Animal Glues)
 - 5) 塗装 (Finish)
 - 6) 家具金物 (Fittings, Metal Work)
 - (1) 蝶番 (Hinges)
 - (2) 把手 (Handles)
 - (3) 錠 (Locks) と鍵 (Keys)
 - (4) キャスター (Castors)

- (5) ネジ (Screws)
- 7) 組立式の構造 (Structure)
- 8) 扉 (Panel Doors)
- 9) パーテーション (Partitions)
- 10) 引出 (Drawers)
 - (1) 蟻組接ぎ (Dovetail Joints)
 - (2) 底板と側板との取り合わせ (Side & Bottom Boards)
- 11) 甲板の黒色革張り (Desk Top with Black Leather)
- 2 肘掛椅子の材料と製作技術 (Materials and Techniques applied for the Armchairs)
 - 1) 木材：マホガニー (Mahogany)
 - 2) 構造・組立方法 (Structure)
 - (1) 枿^{ほぞ}穴と枿^{ほぞ} (Mortice and Tenon)
 - (2) 隅補強材 (Corner Blocks)
 - 3) 突起部材 (Mouldings) と彫刻 (Carvings)
 - 4) 座の緑色の馬毛繊維と詰物 (Green Hair Cloths)
 - 5) その他—接着剤、塗装、ネジ
- VII 関連家具との比較 (Comparison)
 - 1 他の図書室テーブル (Other Library Tables)
 - 1) 「指導書」第3版、第83番の図版 (Director, Revised 3rd Version, Plate No.83)
 - 2) ヘアウッド・ハウスの図書室テーブル (Harewood House Library Table)
 - 2 他の堅琴の椅子 (Other Lyre-back Chairs)
 - 1) ブロケット・ホールの堅琴の肘掛椅子 (Brocket Hall)
 - 2) オスタリー・パーク、イーティング・ルームの堅琴の椅子 (Osterley Park)
 - 3 肖像画に描かれた家具との比較 (Furniture drawn in the Conversation-piece)
 - 1) 図書室テーブル (Library Table)
 - 2) 布で覆われた 肘無椅子：パーラーチェア (Parlour Chair)
 - 3) ペデスタル (Pedestal)
 - 4) 三美神 (Three Graces)
- VIII おわりに (Conclusion)
 - 本文注・引用
 - 図表出典
 - 参考文献・図表出典の短縮形一覧

I はじめに (Introduction)



図1 ノステル・プライオリ全景

ウエスト・ヨークシャー (West Yorkshire)、ウエイクフィールド (Wakefield) のノステル (Nostell) にある「ノステル・プライオリ」と呼ばれる18世紀初頭に建てられたカントリーハウスは、現在英国ナショナル・トラストの資産として保全管理され一般公開されている。論者が以前からこのカントリーハウスに興味を抱いていた理由は、ここに18世紀英国を代表するロンドン

家具職人トーマス・チップペンデル工房製の家具が多数現存していることと、併せて書簡 (Letters)、納品明細書 (Accounts)、請求書 (Bills) など様々な古文書 (Archives) が存在していることであった。これらの古文書はリーズ市のウエスト・ヨークシャー記録局 (West Yorkshire Records Office) に保管されていて、そのコピーがノステル・プライオリにある。今回、ノステル・プライオリのハウス&コレクション・マネージャーであるガレス・J・L・ウィリアムス氏 (Mr. Gareth J. L. Williams) のご好意により、一般公開日を避けて2004年8月23日 (月) と24日 (火) の丸2日間、図書室テーブルと竖琴の肘掛椅子ほかの細部写真撮影、スケッチ、実測、古文書、文献などの調査をさせていただいた。

ウエスト・ヨークシャー、オトレイ (Otley) 出身のロンドン家具職人トーマス・チップペンデルは、出版された自身の家具デザイン書「紳士と箱物家具職人のための指導書」(The Gentleman & Cabinet-Maker's Director) 初版1754年、第2版1755年、第3版1759～62年によって当時から有名であり、その名は大西洋を越えてアメリカ大陸にまで届くほどであった。しかし、チップペンデル工房の家具に

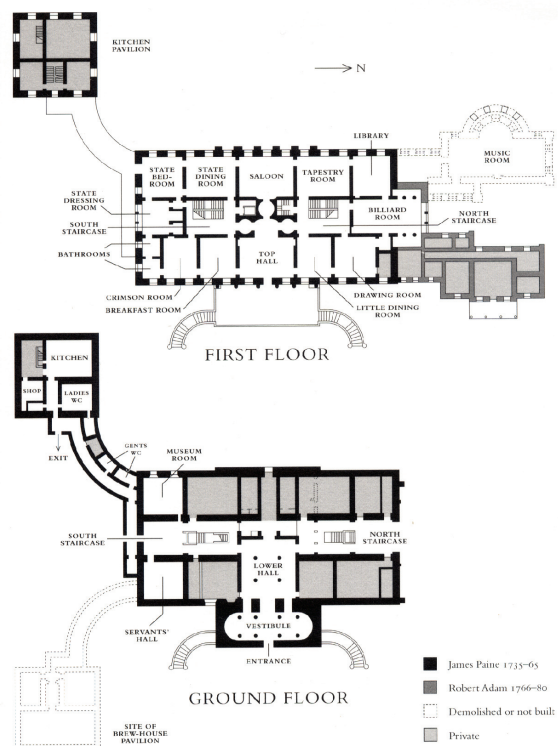


図2 ノステル・プライオリの平面図

はラベルやスタンプ（焼印）のようなものは付されていなかった。そこで、チッペンデル工房製の家具であることを示すためには、家具購入者の手元に残された工房からの納品明細書、請求書、往復書簡などの古文書によって証明する必要がある。

トーマス・チッペンデル工房に関する先行研究は多数存在する。初期の代表的なものは、1924年オリバー・ブラケット著「トーマス・チッペンデル—生涯、作品、及ぼした影響—」⁽¹⁾、1968年アンソニー・コールリッジ著「チッペンデル家具—トーマス・チッペンデルおよび同時代の職人によるロココ様式の作品—ヴァイル、コップ、ラングロイス、シャノン、ハレット、インス&メイヒュー、ロック、ジョンソンその他 1745-1765年」⁽²⁾などである。1968年の家具史学会（Furniture History Society）の学会誌「Furniture History」第4号には、チッペンデル工房に関する古文書がまとめられている。更に1969年にはボーイントンとグッディソンが、ノステル・プライオリに現存する家具が工房からの納品明細書のどの記述に該当するかに関する研究を発表している。⁽³⁾

その後発表されたチッペンデル工房に関する研究の最も重要なものは、1978年にスタジオ・ヴィスタから出版されたクリストファ・ギルバートの「トーマス・チッペンデルの生涯と作品」（2巻セット）である。⁽⁴⁾ 但し同年アートラインから出版された同名の著書（1巻もの）⁽⁵⁾ には、古文書に関する調査をまとめた第1巻第3章の「チッペンデルの後援者と家具」という大切な章が省略されている。ギルバートの著書はトーマス・チッペンデル親子の生涯とその作品を、先行研究を踏まえた上で、一次資料を慎重に精査してまとめた労作である。しかしこの時点では、彼自身が認めているように、1969年のボーイントンとグッディソンの真贋研究を推し進めた訳ではなかった。⁽⁶⁾ その後彼は1990年「Furniture History」第26号掲載論文「ノステル・プライオリの装飾に関する新たな光」において、新たに発見された書簡類と新たに確認された工房製家具を紹介している。⁽⁷⁾

いずれの研究でもチッペンデル工房製とされる家具の真贋に関する記述や、歴史的経緯が中心に述べられている。これに対して論者が本稿で行うことは、先行文献によって確認され、古文書によって確かにチッペンデル工房製の家具であると証明された作品に刻まれた工房の技術や装飾モチーフの扱い方を注意深く観察することを通して、18世紀英国家具産業界を代表するチッペンデル工房に関する理解をさらに深めようとするところである。それは同時に、現存する家具作品に見られる技術や装飾モチーフの扱い方に、家具工房の指紋（Finger Prints）が否応無く刻まれているという論説を証明することでもある。

したがって本稿では、調査研究範囲をノステル・プライオリの図書室テーブルと竖琴の肘掛椅子に絞っている。そしてこれらの一連の家具作品を通して、依頼主、デザイナー・家具職人、現存する書簡・納品明細書・請求書・肖像画というこれらの家具にまつわる背景、施されている装飾モチーフ、使用されている材料や適用された製作技術、建築自体がロココ様式から新古典様式に移行したことによる室内装飾と家具装飾との調和関係、他の



図3 ノステル・プライオリ図書室

カントリーハウスに現存する関連のある家具との比較などについて考察し、18世紀中葉の英国家具産業界を取り巻く現実的な姿を描き出すことを目的としている。尚、本稿の第2章から第4章では先行研究文献の成果を下敷きにして更なる考察を行った。

今回はノステル・プライオリと併せて、ウエスト・ヨークシャーのテンプル・ニューサム (Temple Newsam) とヘアウッド・ハウス

(Harewood House) を訪問した。前者はリーズ市所有の家具コレクションが多数展示されている大きなギャラリーである。チッペンデル学会本部はここにあり、チッペンデル工房製の家具や「指導書」の原画も展示されている。後者はノステル・プライオリと並んでチッペンデル工房製の新古典様式の家具と納品明細書が残されている重要なカントリーハウスである。

最後に、今回の調査研究に当たっては多くの方々のご好意を頂戴した。ノステル・プライオリのガレス・J・L・ウィリアムス氏 (Mr. Gareth J. L. Williams)、テンプル・ニューサムのジェームス・ローマックス氏 (Mr. James Lomax)、ヘアウッド・ハウスのアシスタント記録係ジェーン・スチュアート＝サント (Ms. Jane Stewart-Sant)、学芸員メリッサ・ガリノア (Ms. Melissa Gallinore)、ヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム、家具・テキスタイル・ファッション部門学芸員セーラ・メドラム女史 (Ms. Sarah Medlam)、同じくルーシー・ウッド女史 (Ms. Lucy Wood)、同じくジェームス・ヨーク氏 (Mr. James Yorke) に感謝を申し上げたい。またヨークシャー出身で長年にわたる友人であるジョン・G・ラワリー氏 (Mr. John G. Lowery) と母上にも感謝を申し上げたい。

II 依頼主 (Client) : 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵 (Sir Rowland Winn, 5th Bt)

1 ウィン家の歴史概略とノステル・プライオリ

プライオリ (Priory) とは修道院のことであり、ドンカスター (Doncaster) とウエイクフィールド (Wakefield) を結ぶ道沿いのノステル (Nostell) という場所に建てられたことからノステル・プライオリと呼ばれた。古くはサクソン時代からノステルにある湖のほとりに小グループの修道士たちが住み着いていた。12世紀初頭になってヘンリー1世

THE WINN FAMILY

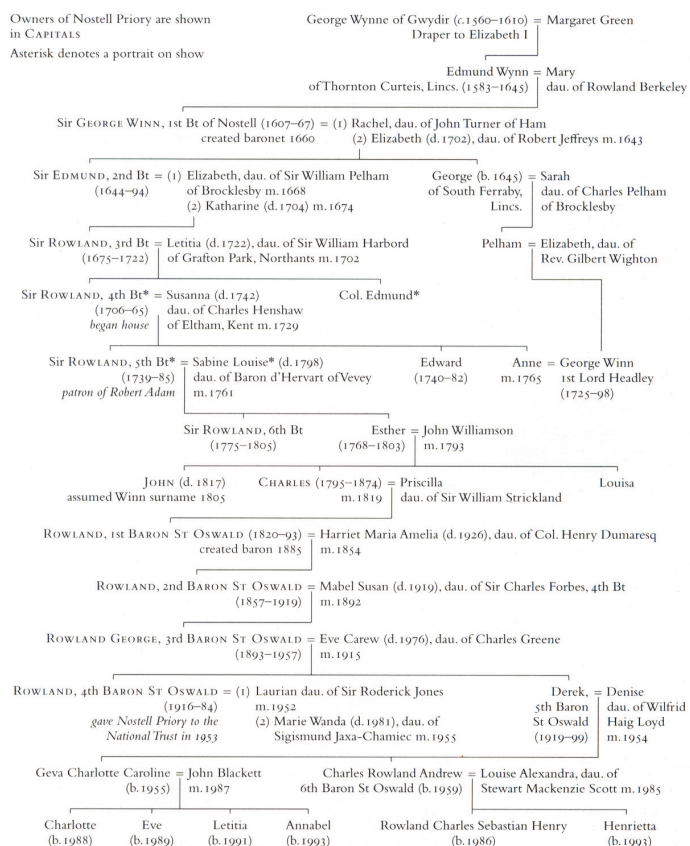


図4 ノステル・プライオリの当主 ―ウィン家系図―

サー・ジョージ・ウィン准男爵（Sir George Winn, 1st Bt：1607-67）となった。この後、3代にわたってウィン家はこの古いマナ・ハウスに住み続けた。そして4代目にあたる第4代サー・ローランド・ウィン准男爵（Sir Rowland Winn, 4th Bt：1706-65）が18世紀初頭に、現在見ることができるカントリーハウスの建設に取りかかった。⁽⁸⁾

このノステル・ホールを購入した第1代准男爵の祖父、ジョージ・ウィン（George Wynne：c1560-1610）は北ウエールズ出身であった。彼はロンドンにおいて織物商として財を成し、エリザベス1世の服地商にも指名されて成功を収めた。裕福になったウィン家はノステルを購入する以前、リンカンシャーにも土地家屋を購入していた。⁽⁹⁾

2 第4代サー・ローランド・ウィン准男爵とジェームズ・ペイン

第4代准男爵は1722年に若干16歳の若さでノステルを相続した。しかし彼はリンカンシャーとノステルの所有地の管理を叔父たちに委ねて、自身はジュネーブでの教育を全うした。18世紀の若い英国紳士は、フランス・カソリック教会の影響がなく、プロテス

付きの司祭ラルフ・アドレヴによって、王室特権が付与された修道院が創設され、教会堂が建てられた。この修道院はノースアンブリア地方のアングロ・サクソンの王セント・オズワルドに奉獻された。しかしヘンリー 8 世が下した修道院解体令によって、この教会堂は 1530 年代に取り壊された。ところが身廊と鐘楼はノステル・ホールと呼ばれたマナ・ハウスに形を変えて残されることになった。その後この土地と建物の所有者は移り変わり、1650 年ウィン家に売却された。ノステル・ホールに住み始めたジョージ・ウィンは 1660 年の王政復古時にチャールズ 2 世から准男爵位を賜り、第 1 代

タント教会が支配的だったジュネーブでフランス語を学んだ。第4代准男爵はそこからさらに2年間のグランドツアーに出かけ、ドイツ、オーストリア、フランス、イタリア、特にナポリ、ミラノ、ベニス、ローマを訪れた。1727年にヨークシャーのノステル戻った彼は、新しい邸宅建設の志に燃えた。当初設計を依頼したのは、当時ヨークシャー各地で活躍していたアマチュア建築家コロネル・ジェームス・モイザー（Colonel James Moyser）であったと考えられている。彼はバーリントン卿（Lord Burlington）に近く、アンドレア・パラディオ（Andrea Palladio）の熱烈な支持者であった。ノステル・プライオリの初期の配置計画は、中央の長方形ブロックから四方のパビリオンに円弧の廊下で繋がる形式の、パラディオのヴィラ・モチェニゴ（Villa Mocenigo）に似ている。しかしモイザーの図面は一つ残されていない。⁽¹⁰⁾

ジェームズ・ペイン（James Paine : 1717-89）がノステル・プライオリの建設に関わるようになったのは1736年、19歳の時である。ロンドンで生まれ、セント・マーチンズ・レーン・アカデミーで教育を受けた彼は、主にイングランド中央部と北部のカントリーハウスの建築に関わった。ノステル・プライオリは彼の初仕事と考えられる。彼はバーリントン卿やウィリアム・ケント（William Kent）の英国風パラディオ様式の流れを汲み、その平面計画は極めて使い易く、その外観は威厳があり、室内装飾にはロココ様式の石膏細工を用いた。⁽¹¹⁾ ノステル・プライオリでは当初モイザーが若きペインに示唆を与えていたと考えられるが、その後ペイン自身が建築自体に大きな変更を加えるようになり、室内装飾の全責任も彼に与えられた。残念ながらペインが行った建築に関する資料はほとんど残されていない。しかしペインが第4代准男爵に送った書簡から、室内装飾を開始したのは1747年であることが判っている。1765年の第4代准男爵の逝去までに家族と使用人はすべてこの新しい邸宅に引っ越していた。しかし主要階の室内装飾は約半数の部屋しか仕上がっていなかった。ペインのロココ様式の石膏細工を施工したのは初代ジョーゼフ・ローズ（Joseph Rose, the Elder : 1723-80）などと考えられている。ノステル・プライオリの階段室、主寝室、大食堂（晩餐会室）の天井の装飾はその代表例である。⁽¹²⁾

3 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵とロバート・アダム、ツッキ、ローズ

第5代サー・ローランド・ウィン准男爵（Sir Rowland Winn, 5th Bt: 1739-85）【以下サー・ローランド】は、1756年から1762年にかけて、父と同じくスイスのローザンヌで教育を受けた。スイス滞在中に知り合ったベバイの知事ハーバート男爵の娘サビーヌ（Sabine Louise: d. 1798）と1761年、彼の地において結婚し、夫人を連れて英国に帰国した。そして1765年、26歳でウィン家の財産を相続することになった。⁽¹³⁾ 彼は父が使用していたペインの代わりに、当時新進気鋭の新古典様式の建築家・室内装飾家ロバート・アダム⁽¹⁴⁾を用いてノステル・プライオリを完成させることにした。アダムがペインに取って代わる

のは、1760年のサイオン・ハウス、1761年のケドルストン・ホールに続いて3件目であった。⁽¹⁵⁾ アダムは1766年からノステル・プライオリの室内装飾の仕事を開始した。そして主にハウスの北側半分を仕上げていった。最初に取り掛かったのが北西端に位置する図書室であり、その後、タペストリー・ルーム、サルーン、トップ・ホールと進んだ。また彼はすでにペインが完成させた室内装飾にも変更を行った。⁽¹⁶⁾ アダムがサー・ローランドに宛てた1772年の書簡からは、彼らの関係が友人関係にまで進展していたことを窺い知ることができる。またその4年後の書簡からは、高級な鹿肉を使った豪勢な昼食会への賛辞と招待に与ったことへの感謝が述べられている。⁽¹⁷⁾ 尚、ノステル・プライオリでのロバート・アダムの仕事に関しては、アイリーン・ハリス博士の近著「天才ロバート・アダム—その室内装飾—」⁽¹⁸⁾ に詳しくまとめられている。

アダムが主に用いた職人たちは、画家アントニオ・ツッキ (Antonio Zucchi : 1726-95)、石膏細工師2代ジョーゼフ・ローズ (Joseph Rose, the Younger : 1745-99)、家具職人トーマス・チップペンデル親子であった。

ベニス出身のツッキはアダム兄弟にイタリアで出会った。1754年にはロバート・アダムとシャルル・ルイ・クレリッソーに同行し、スパラット (Spalato、現在 Split) へ旅した。彼は1766年アダムによって英国に招かれた。翌1767年に描かれたノステル・プライオリ図書室の天井画と壁画は彼の英国での最も初期の作品ではないかと考えられている。⁽¹⁹⁾ ツッキは後に画家アンジェリカ・カウフマン (Angelica Kauffman : 1741-1807) と結婚した。⁽²⁰⁾

2代ジョーゼフ・ローズは、ペインが重用した初代ローズの甥にあたり、アダムが手掛けた邸宅の石膏細工をほとんどすべて請け負った。彼は1768年にローマに旅して古典紋様について学んだことから、その才能を窺い知ることができる。⁽²¹⁾ 彼はアダムの設計図に描かれた石膏細工を施工するに当り、自身でも施工図のスケッチを描いている。⁽²²⁾ そして1782年には「帯状装飾のスケッチ」の出版準備をしていた。⁽²³⁾

4 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵とトーマス・チップペンデル

1) ノステル・プライオリに納められたチップペンデル工房の家具デザイン

トーマス・チップペンデルを第5代准男爵に紹介したのはロバート・アダムではないか⁽²⁴⁾ との説があるが定かではない。いずれにしても、第4代准男爵の代にはウィン家がチップペンデル工房に家具製作を依頼した形跡がないことから、チップペンデルがウィン家の仕事を請け負うようになったのは明らかに第5代准男爵の代になってからと考えられる。

チップペンデルがサー・ローランドに宛てた納品明細書や書簡の内容から理解できる通り、チップペンデルは施主から直接家具製作を請け負っていた。また代金の支払いも直接

であった。更に、1774年6月21日、チッペンデールがサー・ローランドに宛てた書簡に次のように書かれている。「サルーンの家具デザインを含めた展開図を容れた包みをお送りした。この展開図はアダム氏と私の間で合意に達したものである。アダム氏はスケッチされたすべてのものに承認を与えた。椅子とソファはシルク・ダマスクで覆われ、カーテンは光沢があるものにする。ピア・テーブルのトップはアダム氏自らがデザインすると思われる。」⁽²⁵⁾ このようにノステル・プライオリに納品されたチッペンデール工房の家具デザインに関しては、本稿で着目している図書室テーブルと堅琴の肘掛椅子を含めて、チッペンデール自身がデザインしたと考えられる。

2) セント・ジェームスズ・スクエア 11 番地とノステル・プライオリの家具

ノステル・プライオリでのアダムの仕事が始まった 1766 年、サー・ローランドはロンドンのセント・ジェームスズ・スクエア 11 番地（11 St. James' s Square）にタウンハウスを購入している。⁽²⁶⁾ ここもチッペンデール工房によって 1 棟丸々の家具調度品をあつらえた住居であった。しかしこのタウンハウスは 1785 年 4 月サー・ローランドの事故死の直後、4 月 9 日から 11 日まで、クリスティーズで競売にかけられ、その調度品は散逸してしまった。多額の負債を返済するためであったと考えられている。⁽²⁷⁾

ノステル・プライオリに現存する古文書に、図書室のための家具が複数記載されているのは、このセント・ジェームスズ・スクエア 11 番地に納品した家具も併せて記載したためではないかと以前から考えられていた。⁽²⁸⁾ しかし論者が疑問に感じるのは、1772 年 1 月 3 日トーマス・チッペンデールがサー・ローランドに宛てた書簡に、「現下は 600 ポンドを賜り、残りはタウン（ロンドン）にいらした時にどのようなお支払い方法にするのかお決めいただきたい。私はすでに 4,600 ポンドの請求書を送っており、それは絶対にお支払いいただきたい」との記述があることだ。⁽²⁹⁾

ノステルの古文書に残るチッペンデール工房がサー・ローランドに送った納品明細書の 1766 年 6 月から 1770 年 12 月までの累計額は 1,581 ポンド 8 ペンスであった。⁽³⁰⁾ その翌年 1771 年 2 月から 10 月までの新規の納品明細書の累計額は 580 ポンド 12 シリングであった。⁽³¹⁾ 両方足して 2,161 ポンド 12 シリング 8 ペンスである。さらに 1771 年 12 月 7 日までに 723 ポンド 8 シリング 11 ペンスの支払い（返品値引分を含む）があったことがわかっている。⁽³²⁾ それではなぜ 1772 年 1 月 3 日に送った書簡においてチッペンデールは、4,600 ポンドが未払いのままであり、早急に 600 ポンドだけでも支払って欲しいと懇願しているのだろうか。この点はギルバートの前掲書でも議論されていない。

論者は、この 4,600 ポンドの中身はノステル・プライオリの家具調度品に対する請求残額とロンドンのタウンハウス、セント・ジェームスズ・スクエア 11 番地の家具調度品に対する請求残額を合わせたものではないかと考える。

なぜなら 1769 年 3 月 3 日の書簡に、チップendale がサー・ローランドの指示によって、タウンハウス（セント・ジェームズズ・スクエア 11 番地）に納めた家具に関する請求書を送ったばかりであることと、もう片方の分（明らかにノステル・プライオリの分）は未だ取り纏められていないことが記されているからだ。⁽³³⁾

これらのことから判るように、チップendale 工房ではタウンハウスにも多額の納品をしており、1767 年と 68 年にその大部分は納められていたが、1772 年初めの時点でも未払いであったと考えられる。この後、1772 年 6 月 13 日に 200 ポンド⁽³⁴⁾、同年 10 月 1 日に 350 ポンド⁽³⁵⁾、日付なし（1772 年以降）の 100 ポンド⁽³⁶⁾ のそれぞれの領収証があるので、少なくとも 650 ポンドは回収できたようである。

3) 第 5 代サー・ローランド・ウィン准男爵とチップendale 工房との取引関係

往復書簡、納品明細書、請求書から知ることができるサー・ローランドとチップendale 工房との取引関係はどのようなものであったのだろうか。具体的な納品の中身についての言及は極力避けて、お互いの心理状態の推移と代金支払いを巡るトラブルを年代順に経緯を追って述べてみたい。

チップendale 工房がサー・ローランドに送った書簡は数多く残っている。逆に、サー・ローランドがチップendale に送った書簡のコピーが残されているものは 3 通しかない。⁽³⁷⁾ しかもその内 2 通がとても厳しい内容のものである。その他のサー・ローランドの書簡は残されていないが、チップendale から来た書簡にサー・ローランドが記した注釈 (Annotation) が残っている。この注釈によって、チップendale の書簡に対するサー・ローランドの返事がどのような内容であったかを推測することができる。

(1) 1766 年から 1770 年

共同経営者レニーが亡くなったばかりの 1766 年は、サー・ローランドから多くの注文を賜り、チップendale と息子は喜んでいたことであろう。なぜなら、レニーが注ぎ込んだ資産を回収しようとしてレニー関係の職人が強行した在庫一掃セールによって、チップendale は非常な苦境に立たされていたからだ。⁽³⁸⁾ 実際に工房は資金難に陥り、材料不足と職人難によって顧客からの注文に納期通り応じることが困難になっていた。

そのような中、1767 年 9 月 27 日、サー・ローランドからトーマス・チップendale に書簡が届いた。チップendale の仕事の遅さと、何度も書き送った催促の書簡に対して中々返事をよこさないことに業を煮やしてこう語っている。「…上得意の私に対して敬意を払わないつもりであれば、他にもっとましな人物を見つける努力をする。今まで友人であった私を今後は大いなる敵と見なすようになるであろう。…今仕掛かっているダマスクベッドと鏡は仕上がっているかいないかに関わらず即刻送るように。また既に発注している家具に関してもこの手紙が届くまでに仕上がっていなければ送らなくてよろしい。それらは

その内どこからか調達する。…私が以前推薦すると言った紳士方にはお前のことは知らせずにおこう。彼らが誰か他の人物を雇うことを願っている。…」⁽³⁹⁾

これに対してチップendaleは即座に返事を書いている。1767年10月1日チップendaleは、仕事が遅れている理由について、タウン（ロンドン）には様々な種類の仕事がありにもたくさんあり過ぎて、すべてを予定通りにこなすことは不可能であると釈明している。そして仕掛かり中の家具の仕上がり具合を、下請職人の仕上がり状態まで言及して詳細に説明している。⁽⁴⁰⁾ その後、1768年1月11日のチップendaleの書簡では、自分に残りの注文を仕上げる長い期間を賜ったサー・ローランドに感謝を捧げている。そして今後状況が改善することを希望すると述べている。⁽⁴¹⁾ このことからサー・ローランドの怒りは表面上収まったように見受けられる。この書簡の後半では、この遅れの原因はほとんどが英国王室から賜った相当量の予期せぬ注文のためであったとも述べている。そしてチップendaleが資金難に陥っていて、恐れながら小額の現金を工面していただきたいとの記述もある。⁽⁴²⁾ しかしこの希望は直ちには叶えられなかった。

1767年中には、3月13日に100ポンド（現金）、6月13日に20ポンド（現金）、7月31日振出の40ポンド（約束手形）が支払われただけである。そして1768年においては、5月21日に100ポンド（現金）が支払われただけであった。⁽⁴³⁾

翌1769年2月3日のチップendaleの書簡には、ビジネスを続ける資金がとても不足しており、工房の職人に支払う金銭が一切ないことと、ここ3日間300ポンドを支払うという約束をした人物が現われるのを待っているが、約束を反故にして現われそうもないことが記されている。そして、サー・ローランドを頼りにして、振り出し後6週間もしくは2ヶ月の引き落としで構わないから約束手形を送っていただけないかと懇願している。⁽⁴⁴⁾ 確かにチップendaleはサー・ローランドを後援者として頼りにしていたようである。しかし初期の納品からすでに2年半が経過していたが代金は回収できていなかった。

この依頼に対してサー・ローランドはタウンハウス（セント・ジェームズズ・スクエア11番地）の納品分に関する請求書を送るように指示したと考えられる。そこで1ヵ月後の1769年3月3日の書簡と共に、チップendaleはタウンハウス分の請求書を送った。しかしノステル・プライオリの分はまだ纏めることが出来なかった。そして振り出し後6ヵ月で構わないから200ポンドの約束手形を送っていただきたいと願っている。併せて31ポンドと20ポンドの約束手形も取引業者の為に送っていただきたいと願っている。⁽⁴⁵⁾

1769年中の支払額は、3月10日振出の51ポンド10シリング（約束手形2枚分）、3月11日振出の200ポンド（約束手形6ヶ月）だけである。その上、4本支柱のベッドフレームと深紅のファブリックに関する返品・値引きのために11ポンド18シリング11ペンスのマイナスが計上されている。⁽⁴⁶⁾

実は、この辺からサー・ローランドの支払いの悪さが露呈してきている。6ヶ月後の9

月になってもこの200ポンドの手形は落ちなかった。1769年9月27日のチッペンデルの書簡⁽⁴⁷⁾と10月4日の書簡⁽⁴⁸⁾にこのことが記されている。すなわち、小額の手形は落ちた。しかしサー・ジョージ・コレブルック勲爵士の銀行にあった200ポンドの手形は落ちなかった。サー・ジョージの善意とチッペンデルの信用で、この手形は直ぐに換金された。しかしこの200ポンドはサー・ローランドから払い込まれなかった。そこでサー・ジョージはこの手形の払い込みをするようチッペンデルに強く迫った。しかしチッペンデルが約束した払い込みの期限を守らなかったので厳しく責め立てた。

サー・ローランドは10月11日に返事を書いている。⁽⁴⁹⁾ 現存していないが、10月18日のチッペンデルの書簡から推測すると、サー・ジョージ・コレブルック銀行から手形を買い戻して欲しいとの内容であった。これに対してチッペンデルは努力をしたが、資金難の為どうにもならず、現金を送って欲しいと懇願している。またサー・ローランドの支払いの悪さによって大変苦しんでいることと、サー・ジョージ勲爵士の信用を回復不可能なほどに著しく損なったことを嘆いている。⁽⁵⁰⁾ ビジネスにおいて振出手形が落ちないということは、その会社の経営が悪化していることを如実に表すことであり、倒産の一步手前の状況である。この手形が落ちなかったことはサー・ローランドの信用も傷つけたであろう。ところがこの場合、サー・ジョージ・コレブルック銀行とウエイクフィールドやヨークシャー内の金融機関との取引関係が確立していなかったことも手形が落ちなかった原因であるようだ。⁽⁵¹⁾

このチッペンデルからの現金振込依頼に対してサー・ローランドは10月28日に返事を書いている。現存していないが、ウエイクフィールドにあるサー・ローランドの手形振出銀行と取引があるロンドンの他の銀行宛てに、新しく200ポンドの手形を振り出すという内容であったと推測される。⁽⁵²⁾ これに対して10月31日のチッペンデルの書簡には、短期間で確実に換金される新しい約束手形があればサー・ジョージ・コレブルック勲爵士を満足させられると記している。⁽⁵³⁾ この書簡に記されたサー・ローランドの注釈から判るのは、11月8日にサー・ローランドは返事を送り、それと共に振出後6週間の200ポンドの手形をロンドン、ストランドのサミュエル・ルンド銀行宛てに送っている。⁽⁵⁴⁾ 結局この手形は落ちたようであるが、最初に200ポンドの手形が振り出されてから実に9ヶ月後のことであった。

ところが、このような約束手形の不渡りはもう1回あった。1770年3月17日にサー・ローランドが振り出した300ポンドの約束手形(100ポンドずつ3枚)の内、100ポンド分が落ちなかった。1770年7月5日のチッペンデルの書簡には、この4年前に亡くなったチッペンデルの以前の共同経営者ジェームス・レニー (James Rannie: d. January 1766) が抱えていた職人の一人ヘンリー・ファーガソン (Henry Ferguson) が、不渡りとなった手形をチッペンデルに送り返してきて、すぐさま現金化するように強く迫って

きたので、どうかお金を送っていただきたいと記している。さもないと逮捕されるかもしれないとも述べている。⁽⁵⁵⁾ チッペンデールは明らかにサー・ローランドの手形をそのままファーガソンへの支払いのために与えていたことがわかる。これに対して7月10日にサー・ローランドはその金額は送られる予定であると伝えた。⁽⁵⁶⁾ところが9月25日のチッペンデールの書簡には、新しく送っていただいた100ポンドの手形はロンバート通りのブラウン&コリンズ銀行にあるので、どうかすぐにお支払いをお願いしたいとの記述がある。職人たちに支払うお金を集金する宛てがないので、借金をしなければならないとも述べている。⁽⁵⁷⁾

そしてこのチッペンデールの書簡に対して、サー・ローランドは本当に頭にきたようである。俗な言い方を借りれば「切れた」ということになる。1770年10月4日にサー・ローランドはチッペンデールに返事を送った。「…すでに100ポンドずつ2枚の手形の支払いは済ませてあり、このような大金を支払ってもその甲斐もなく、絶えずお前には失望させられ続けている。どうして更なる支払いを期待できるのか。…友人の保護に感謝することを知らないのならば、それを失うことを知るだろう。…お前の自宅を訪れたときに、職長のベンソンがその場に居たが、私が注文したすべての調度品を1ヶ月以内に納品すると誓って約束したにも関わらず、もうすでに4ヶ月近く経つ。その間に受け取った物は令夫人（サビーヌ）のコモードだけだった。しかも、お前自身が測ったにも関わらずその場所には大き過ぎたので送り返さなければならない。また、7ヶ月近く前に、私が注文してあるものを仕上げなければ今後代金の支払いには一切応じられないと申し渡した時、それらを2週間以内に仕上げると保障したにも関わらず一つも納品されていない。インディアンペーパーについて2度も書き送っているにも関わらず何一つ返事をよこさない。…このままの状態を続けるのであれば、今後一切取引はしないし、発注してある品物を見るまでは支払いを期待してもらっては困る。この書簡はコピーをとっておく。」⁽⁵⁸⁾

ここでサー・ローランドとチッペンデールとの関係は最悪の状態を迎えた。この後、1770年11月15日にサー・ローランドから別の手紙が送られたようであるが現存していない。⁽⁵⁹⁾これに対してチッペンデールは11月20日に書簡を送っている。⁽⁶⁰⁾こうなるずっと以前にサー・ローランドの家具を完成できなかった力不足に対する謝罪が先ず述べられている。そして真実を明かすとして次のことを述べている。共同経営者レニーの死（1766年1月）後、仕事を再開するには非常に資金が不足していたこと。この夏（1770年夏）まで何とか我慢してやってきたが、この夏は致命的であったこと。負債者に対する支払いをする資金だけでは何とか工面できたが⁽⁶¹⁾、投獄されることをほとんど避けることが出来なかったこと。“I Could hardly keep My Self out of a jail.” 自分自身の家計を貧しく支えるだけのお金でビジネスをしなければならなかったこと。そしてサー・ローランドが手形のためのお金を送って下さらなかったことで、それが大いにチッペンデールを傷つけたこと。

そして今でも未払いであること。サー・ローランドにご迷惑をお掛けすることは出来ない
ので、自分が責めを負おうとして知らせなかったこと。手短に言えば、ここ5ヶ月間（7
月以降11月まで）は、我が身に降りかかった数々の災難のために、正気ではなかったこと。
すべてご承知のことと存じるが、どうか伏してお赦しいただきたいとある。この手紙から
窺い知る通り、不渡り手形が原因で投獄され、それらの不幸が重なって気を病んでいたチッ
ペンデールの姿が想像される。

そして1770年12月22日にノステル・プライオリの家具に関する請求書を一旦締めて
いる。納品額1581ポンド8ペンスに対して、支払額823ポンド8シリング11ペンス、
残金757ポンド11シリング9ペンス（8ペンスは値引き）である。⁽⁶²⁾

1770年中の支払額はこの300ポンド（約束手形100ポンド3通）であった。しかし、
この内100ポンドは結局不渡りのままであったので、1年後（1771年12月7日）の請
求書では支払い額を200ポンド（約束手形100ポンド2通）に訂正している。すなわち、
支払額723ポンド8シリング11ペンス、残金857ポンド11シリング9ペンスと訂正さ
れた。⁽⁶³⁾

ところで、問題のロンバート通りのブラウン&コリンズ銀行にあった100ポンドの手
形は1772年以降に結局落ちたようである。トーマス・チッペンデールが100ポンドをブ
ラウン&コリンズ銀行から引き出したという日付が無い引出証書が見つまっている。⁽⁶⁴⁾

(2) 1771年から1772年

ここでチッペンデール工房に転機が訪れる。以前の共同経営者レニーの簿記係（Book
Keeper）トーマス・ヘイグ（Thomas Haig）が1771年に新たな共同経営者になったので
ある。このことにより資金的には大分安定したと考えられる。また利子を請求するなど、
工房の資金繰りに関する改善も見られた。⁽⁶⁵⁾ 1771年2月以降の納品明細書はチッペンデ
ール・ヘイグ&カンパニーの名で書き送られている。1771年の書簡からは会社組織として
のきちんとした対応が読み取れる。送った家具調度品の種類、数量、荷馬車便（Waggon）
の名前などをサー・ローランドに詳しく説明する記述が見られる。⁽⁶⁶⁾ 依頼主に連絡の不手
際を責められることもなくなったと考えられる。ビジネスは顧客によって強められる。
1771年2月21日から10月28日の間にチッペンデール・ヘイグ&カンパニーの名で新
しく送られた納品明細書の総額は580ポンド12シリングであった。⁽⁶⁷⁾ そして1771年12
月7日に前述の訂正版の請求書が送られた。⁽⁶⁸⁾

そして迎えた翌1772年1月3日に、今度はチッペンデールからサー・ローランドに、
とても厳しい内容の書簡が送られることになった。「タウンに帰って来てからとても多くの
仕事があったので早急にお便り差し上げられず誠に申し訳なかった。私は貴殿に対する納
品明細書（帳簿）を厳しく注意を払って確認したところである。貴殿への請求額はどのよ
うな家具職人でも普通に請求するであろう金額であり（つまり不当に高く請求している訳

ではない)、この上もし、椅子やブラインドや、貴殿がサイズなどの変更を指摘したその他の品物を持ち帰るのであれば、失敗が指摘されたこれらの商品から、一切の利益を失ってしまうであろう。私が主張してきた代金の支払いをするべき時がきた。私を心に掛けて支えようとおっしゃるのであれば、直ちに現金化できる手形か現金そのものでお支払い頂きたい。現下は 600 ポンドを賜り、残りはタウンにいらした時にどのようなお支払い方法にするのかお決めいただきたい。私はすでに 4,600 ポンドの請求書を送っており、それは絶対にお支払いいただきたい。どうか私を失望させないでいただきたい。伏してお願い申し上げます。納品明細書をご確認いただければ大部分の仕事はかなり以前に仕上がっていることがご理解いただけるであろう。」⁽⁶⁹⁾ これはチップペンデルの「逆切れ」とも言える。

1772 年 1 月 25 日に更に次のように書き送っている。「今月初めにお便り差し上げ、伏してお願い申し上げたので、もうすでに貴殿から何らかのお返事を頂戴しても良いはずである。私への支払いの時は到来した。私は貴殿の援助により頼んでおり、私が要求した金額をお支払いいただくという貴殿からの援助が得られないのであれば、私は完全に破産してしまうであろう。貴殿のお力で私の望みを叶えてくださるよう伏してお願い申し上げます。納品明細書を見ていただければ、ほとんどの仕事は 1767 年と 68 年にすでに終わっていることがご理解いただけると思う。このような信用取引はどのような人にとっても長すぎるものである。私自身も代金を 12 ヶ月毎、もしくは 6 ヶ月毎に支払う義務があり、もし私が支払期限を過ぎれば利子を支払う義務が生じる。郵便によるお返事を切に願う。」⁽⁷⁰⁾ この記述から下職や納入業者に対する工房からの支払いは年払いもしくは半年払いであったことがわかる。これに対してサー・ローランドは、椅子 4 本、ベネシャン・ブラインド 6 本、4 種類の青と白の壁紙 11 巻、そのための飾り縁（ボーダー）1 本、麻マット、150 フィート分の梱包用の箱を送り返したと注釈に記されている。⁽⁷¹⁾

ここで、真の後援者（パトロン）とは何かという問にぶつかる。サー・ローランドはチップペンデルの後援者を自称していた。チップペンデルは納品の約束の期日を守らず、いつも遅くなっていたのであるから、サー・ローランドの言い分にも確かに一理ある。しかし、後援者を自称するなら、なぜ代金の支払いをしないのかとのチップペンデルの訴えはもっともである。サー・ローランドは自分の資金力を超えて発注をしてしまったのであろう。しかし、家具工房の経営者をここまで窮地に追い詰めながら、支払いの代わりに特別注文生産させた品物を不良品扱いで返品するとは、あまりにもひどい仕打ちではないだろうか。結局この年（1772 年）には前述の通り、6 月 13 日に 200 ポンド、10 月 1 日に 350 ポンドの受領証と、日付なしの 100 ポンドの引出証書が残されている。⁽⁷²⁾

(3) 1774 年から 1785 年

1772 年以降のチップペンデル工房のノステル・プライオリでの仕事に関しては 1978 年時点では不明であった。しかしギルバートは、1990 年の「ノステル・プライオリの装

飾に関する新たな光」において、新しく発見されたチップendale工房からの書簡や納品明細書（1774～1785年）を出版することによって、その全容を明らかにした。

1774年から1785年にアダムはサルーン、タペストリー・ルーム（当時は応接室：Drawing Room）、トップ・ホールの設計とデザインを行った。アダムの銀行通帳によく記載が見られるロンドンの職人セフェリン・ネルソン（Sefferine Nelson）の請求書「1772年6月27日、サー・ローランド・ウィン准男爵のために行った彫刻代金」がある。これによれば、セフェリン・ネルソンがアダムの元でノステル・プライオリのために円形台座やカーテンの上飾りなどを製作したことが判る。⁽⁷³⁾ 彼はアダムを通して仕事を請け負った。

これに対して、チップendaleとアダムの関係は、1774年6月21日のサー・ローランドに宛てたチップendaleの書簡⁽⁷⁴⁾ からわかるように、相互に尊敬の念を抱きつつ、独立して施主・依頼主から直接仕事を請け負うものだった。

1774年5月5日にチップendaleがサー・ローランドに宛てた書簡では、ノステル・プライオリの当時の応接間をチップendaleが採寸して作図したものを、サー・ローランドが紛失してしまったらしいので、応接間の測り方について詳細に記述している。そして文末に「前回までの懸案事項であるお支払いの件についてお互い満足がいくようにお勘定を精算していただきたい。私は貴殿がロンドンに来られるまで何とか資金繰りの算段をしなければならない」と締めくくっている。⁽⁷⁵⁾ この時点でお互いの言い分は平行線であり、チップendaleはサー・ローランドからの未払い金を抱えていたことが判る。

結局1774年から始まった当時の応接間、サルーン、トップ・ホールの家具調度品製作にチップendale工房は再び関わることになった。ところで2代トーマス・チップendaleは、初代チップendaleが亡くなる1779年に先立ち、1776年夏に父の後を継いだと考えられている。そして会社はヘイグ&チップendaleとなった。

1781年6月30日のヘイグ&チップendaleがサー・ローランドに宛てた書簡には、「…すでに2年以上にわたって以下のお品物について仕上げの指示をお待ちしている。こんなにも長期間資金を寝かしているということは甚大な損害だ。…」と語った上で、応接間（当時）とサルーンの家具についての仕上がり指示待ちのリストを記している。⁽⁷⁶⁾ このリストの内、実際に納品されたものは、サルーンの8脚の椅子とソファ2本だけである。⁽⁷⁷⁾

その後1781年7月10日にトーマス・ヘイグがノステルに滞在していたトーマス・テイラーに宛てた手紙には次のように記されている。「サー・ローランドがロンドンを出発する際にヨークシャーに着いたなら直ちに支払いをするとおっしゃったのに、どのようにこの失望感を言い表せばよいかわからないほど非常に驚いている。」⁽⁷⁸⁾ サー・ローランドは海外に出かけたそうである。この時点になってもまだチップendale工房はサー・ローランドの代金の未払いに苦しんでいたことが判る。

しかし、第5代サー・ローランド・ウィン准男爵は1785年4月初め、ロンドンのタウンハウスに帰る途中、交通事故で突然逝去することとなった。1785年4月6日にヘイグ&チッペンデルがその息子第6代サー・ローランド・ウィン准男爵に宛てた納品明細書の末尾には「上記すべての未完成の状態での総額 570 ポンド」と記されている。⁽⁷⁹⁾

1785年4月16日のノステルのリードビーター氏へ送ったヘイグ&チッペンデルの書簡にも、先代の未亡人宛てに「まだ完成していないが、すぐ仕上げられる状態にあるもの」として、サルーンと応接間（当時）の家具のリストが書かれている。⁽⁸⁰⁾ 結局これらはノステル・プライオリに納品されなかった。このように工房も自衛をしたのであろう。

第5代サー・ローランドは父が始めたカントリーハウスの完成を目指して建設を推し進めた。その功績は確かに評価できるが、あまりにも手広く行いすぎて多くの未払い賃金を残して世を去ることになった。彼の孫にあたるチャールズ・ウィンは、あまりに大きくなりすぎて、その創建以降ずっと一族の重荷であったノステル・プライオリを取り壊そうとの思いにかられたという。⁽⁸¹⁾

(4) ヘアウッド・ハウス（Harewood House）と工房との取引関係

トーマス・チッペンデルのヘアウッド・ハウスでの仕事を示すものに、1772年12月から1777年6月7日までのチッペンデル工房からの納品・請求書（勘定帳）が現存している。残念ながら1772年までの初期の帳簿（約3024ポンド分）は存在していない。この初期の簿価を含めて1777年6月までに約6839ポンド相当の品物がヘアウッド・ハウスに納品された。⁽⁸²⁾ また、エドウィン・ラッセル卿の執事サミュエル・ポッペルウェル（Samuel Popelwell）が記した日記帳（Day Work Book）が存在している。これは1769年10月16日から1776年10月15日までヘアウッド・ハウスで行われた日ごとの作業を記したものであり、その中にチッペンデル工房の職人たちの作業内容が記されている。そして現場職人としてジェームズ氏とリード氏の名前も見られる。この記録によって1769年から1772年までに納品されたチッペンデル工房の家具調度品が特定できる。⁽⁸³⁾ そして、ロンドン在住のラッセル卿に宛てた執事からの書簡を纏めた「執事からの書簡本」（Steward's Letter Book 1762-92）も存在している。⁽⁸⁴⁾ しかし、チッペンデル工房とラッセル卿もしくは執事のポッペルウェルとの間の往復書簡は現存していない。

「執事からの書簡本」p.243の1771年2月13日には次のような記述がある。「もしそれほど多くの売掛金があるというのなら、チッペンデルが仕事を中断すると言ってきても不思議とは存じない。もし彼に対する勘定を精算するのであれば、どうか彼の指示で支払ったジェームズ氏の賃金6ポンド1シリング6ペンス1/2を除いていただきたい。チッペンデルは明細を持っている。…」⁽⁸⁵⁾ この後エドウィン・ラッセル卿は支払いに応じたかどうか不明であるが、p.309の1777年5月21日の執事からの書簡には「チッペンデルへの支払いをまだ完全に済ませていないことを希望する。昨日私のノートを非常に注意

深く見直していたところ、1775年1月18日、彼に16ポンド16シリングをすでに支払っていたが記帳されていなかったことが判明した。このような大失敗で混乱させてしまって幾重にもお詫び申し上げる。」⁽⁸⁶⁾と記されていることから、ラッセル卿はチップendale工房からの請求額を完済したと考えられている。⁽⁸⁷⁾

このようにチップendaleは1771年2月に勘定の精算に応じようとしないうラッセル卿に対して、仕事の中断も辞さないという態度に出た。従って、1772年1月にチップendaleがノステル・プライオリのサー・ローランドに対して強い調子の書簡を送った後、代金の支払いに応じないのなら同じように職人を引き上げるという強行姿勢に出たのではないかと想像される。この結果その年の内にサー・ローランドから650ポンドを何とか回収できたのであろう。

(5) メルシャム・レ・ハッチ (Mersham Le Hatch) と工房との取引関係

チップendale工房と顧客との間の往復書簡が現存しているカントリーハウスは、ノステル・プライオリの他にもう一つある。サー・エドワード・ナッチブル准男爵 (Sir Edward Knatchbull, Bt) のケント州にあるメルシャム・レ・ハッチである。ここには1767年8月24日から1778年12月23日までの納品・支払明細書 (勘定帳) と、1770年10月15日から1779年10月15日までの書簡と、サー・エドワード・ナッチブル准男爵のポケット・ノートブック「ハッチの建築&装飾帳簿 1762-84」などが残されている。チップendale工房への支払い総額は約1773ポンドであった。⁽⁸⁸⁾

このサー・エドワードは非常に気前が良い紳士であり、端数を値切ったものの支払いには全部きちんと応じた。氏の寛大さに対するチップendaleの感謝が書簡の中に溢れている。特に1770年11月2日付けのサー・エドワードからの150ポンドは、ノステルのサー・ローランドの未払金や不渡手形のために非常に苦しんでいたチップendaleを助けた。

また、1772年1月6日には未払いの100ポンドに対する半年分の利子2ポンド2シリングの支払いもしている。そして1774年11月5日にも100ポンドに対して2ポンドの利子を加えて払っている。これはトーマス・ヘイグが共同経営者としてビジネスに参画した時期以降のことである。勘定を清算しようとしないう顧客の仕事の中断も辞さない姿勢を見せること、約束手形に対する利子を請求すること、顧客にこまめに連絡をすることなどは、ヘイグの貢献であったような印象を受ける。またこれはヘイグが共同経営者になった年22歳になっていた2代トーマス・チップendaleの貢献かもしれない。それとも経営の安定を背景にして初代チップendaleが精神的に安定したからであろうか。

ギルバートによれば、チップendaleは当座資金の不足から、納品の遅れ、見積以上の請求、滞在費用を多く請求するための余分な滞在をし、それが後援者を苛々させた。⁽⁸⁹⁾確かに1771年1月のサー・エドワードからの書簡には納品・請求書に記された金額が当初の見積額より高いので確認して欲しいという記述がある。⁽⁹⁰⁾ またこの書簡には次のような

記述もある。「チッペンデルが遣した^{よこ}壁紙職人が最悪であり2日も仕事をサボった上、仕事を放棄して帰ってしまった。そこで地元の職人を雇った。よって前の職人の旅費と日当を請求するのは不当ではないか。」⁽⁹¹⁾ それから、1778年8月中旬の書簡にも次のような記述が見られる。「チッペンデルが遣した職人が11週間も滞在している割に碌に仕事もしていない。その職人の日当を私に請求するつもりなのか。」⁽⁹²⁾ これらは当然請求金額から差し引かれた。チッペンデル工房にも職人の質に問題があったことが窺える。

それにも関わらず、サー・エドワードはチッペンデル工房と公正な取引を行った。1778年12月23日の請求書には117ポンド4シリング6ペンスの残金があったが⁽⁹³⁾、1779年10月14日の「ハッチの建築&装飾帳簿 1762-84」には病床にある初代トーマス・チッペンデル（1779年11月13日埋葬）を念頭に置いて「椅子張り職人チッペンデルを覚えて全請求金額119ポンド7シリングを支払った」とある。⁽⁹⁴⁾ すなわち1年分の利子2ポンド2シリング6ペンスを足して全額支払ったのである。翌10月15日の工房からの書簡には、時機に合った支払いに対する感謝の言葉が述べられている。⁽⁹⁵⁾ サー・エドワードは最も有益なお金の使い方を心得た人物であった。チッペンデル工房はこのような善意の顧客に支えられたのである。

5 第4代・第5代・第6代セント・オズワルド男爵とナショナル・トラスト

ノステル・プライオリ建設当初の施主である第4代サー・ローランド・ウィン准男爵とその後継者でありハウスの完成者である第5代サー・ローランド・ウィン准男爵の子孫である第4代セント・オズワルド男爵（Rowland, 4th Baron St Oswald : 1916-84）の寛大な取り計らいによって、1953年ハウス自体の所有権が、納税の代替としてナショナル・トラストに移管されることになった。1984年の第4代男爵の死後、弟の第5代セント・オズワルド男爵（Derek, 5th Baron St Oswald : 1919-99）とその家族の協議の結果、その収蔵品であるトーマス・チッペンデル工房製の家具とその他の主要な収蔵品もナショナル・トラストの資産となり、以降保全管理されている。そしてノステル・プライオリのための基金が創設され、後の世代のためにハウスとその収蔵品の保守・修復を可能にすることができた。第5代男爵はハウスの管理と一般公開の責任を1997年まで負っていたが、これ以降はナショナル・トラストがこの責任を引き継いでいる。尚、現在でもノステル・プライオリは第6代セント・オズワルド男爵（Charles Rowland Andrew, 6th Baron St Oswald: b.1959）とその家族の住まいである。⁽⁹⁶⁾

Ⅲ デザイナー (Designer)・家具工房オーナー経営者 (Cabinet-maker & Entrepreneur)：トーマス・チッペンデル (Thomas Chippendale, the Elder and the Younger)⁽⁹⁷⁾

1 トーマス・チッペンデル略歴 (初代：1718-79、2代：1749-1822)

トーマス・チッペンデルは1718年6月5日、ヨークシャーのオトレで幼児洗礼を受けた。幼少の頃のことはほとんど不明である。指物師・建具師 (Joiner) の父ジョン・チッペンデル (1690-1768) と最初の妻メアリー (1693-1729) の一人息子として生まれたトーマスは家業を手伝う中で指物の仕事を学んだと考えられている。そして、ヨークの指物師であり家具職人であったリチャード・ウッド (Richard Wood) に弟子入りした。彼はチッペンデルが発行した「指導書」への寄付として8冊を購入している。また、チッペンデルがリチャード・ウッドにノステル・プライオリ用の家具の鋳を送ってくれるように依頼したこともあった。⁽⁹⁸⁾

トーマス・チッペンデルのロンドンでの最も初期の痕跡を示すものは1748年5月19日、メイファアのセント・ジョージ・チャペルでのキャサリン・レッドショー (Catherine Redshaw; d.1772) との結婚証明書である。30歳の時のことである。長男の2代トーマスは1749年4月23日コベントガーデンのセント・ポールで幼児洗礼を受けた。キャサリンにはトーマスの後、4人の息子と4人の娘が生まれた。1749年チッペンデルはコンデュイット・コートにささやかな家を借りた。そして1752年中頃にはノースアンバーランド伯爵の大邸宅に隣接するサマーセット・コートの建物に引っ越した。この時点で彼は下請家具職人としてのビジネスを立ち上げていたと考えられている。また、自由契約のデザイナーとして家具業界に貢献していたとも考えられている。⁽⁹⁹⁾

1753年は、「紳士と箱物家具職人のための指導書」の図版の原画制作のために忙しかった。チッペンデルは、彼の製図と絵画の師と考えられているマティアス・ダーリー (Matthias Darly) と数ヶ月間同居した。マティアスは「指導書」の彫版画のほとんどを彫刻した人物である。⁽¹⁰⁰⁾

1754年、チッペンデルは更に広い面積のセント・マーチンズ・レーン (後に60、61、62と番号が付された) の建物に引っ越した。ここを拠点に家具ビジネスを約60年間展開することになった。彼はジェームス・レニーとの共同事業に乗り出し、チッペンデル&レニーを設立した。彼らは新しい建物を「箱物家具と脚物家具の倉庫」と呼んだ。レニーは裕福なスコットランド人の商人であり、資本を投入した。彼と彼の簿記係トーマス・ヘイグがビジネスの会計面を見ていたと考えられている。そして1754年4月初版の「紳士と箱物家具職人のための指導書」が出版された。彼はそれをノースアンバーランド伯爵に捧げている。標題が示す通り、読者層は貴族、紳士階級、そして同業者であった。この

「指導書」の出版以降、実に様々な貴族階級の人々がチップendaleの顧客になった。第2版は1755年に出版された。尚、1755年3月には火災があった。そして第3版は1759年から1762年にかけて出版された。⁽¹⁰¹⁾

ところが1766年1月共同経営者レニーが亡くなった。レニー関係の職人たちが、レニーの注ぎこんだ資金を回収することを意図して、3月と4月に工房において競売を開催させた。この競売はとても上手に広告された。「チップendale氏と共同経営者レニー氏の工房の正真正銘、価値ある全在庫品のセール…良質のマホガニー材やチューリップウッド材の種々の家具、意匠登録された椅子、好奇心をそそる箱物家具、カーペット、良質の羽根など…良質のマホガニー材や他の木材の丸太、製材、突板、羽目板など多くの未完成品在庫」⁽¹⁰²⁾ このセールはチップendaleに倒産を回避させようとの配慮とも受け取れる。しかしサー・ローランドへの書簡からはチップendaleの深い苦悩が読み取れる。

この窮地を救ったのは、1771年に新しく共同経営者となったレニーの元簿記係トーマス・ヘイグと、同じくレニーの職人であったヘンリー・ファーガソンであった。ヘイグはレニーの死後も工房に残っていた。ヘイグはレイの未亡人から2,000ポンドの借入金があったようだ。ここにチップendale・ヘイグ&カンパニーが誕生した。前述のように、この後工房は資金的にも信用面においても安定性を増したと考えられている。⁽¹⁰³⁾

2代トーマス・チップendaleは早くから父の工房で働いていた。18歳の時に父に代わってサー・ローランドに書簡を送っている。⁽¹⁰⁴⁾ また、22歳の時の書簡も残されている。⁽¹⁰⁵⁾ 2代チップendaleは、1776年夏に父がケンジントンの慎ましい家に退いたのを機に工房の後を継いだ。⁽¹⁰⁶⁾

初代トーマス・チップendaleは1772年に最初の妻キャサリンを亡くした後、1777年8月にエリザベス・デイビスと再婚して更に3人の子どもを設けている。その後1779年に最後の病氣療養のためにホックストンに移り、そして亡くなった。亡骸は1779年11月13日にセント・マーチンズ・イン・ザ・フィールドに葬られた。⁽¹⁰⁷⁾

2代トーマス・チップendaleは1779年の父の死後、トーマス・ヘイグが1796年に引退するまで工房を共同経営した。社名はヘイグ&チップendaleとなった。ところがヘイグは、1803年に亡くなるに当たって、工房の後継者である2代チップendaleの借用証書によって保証された10,000ポンドを超える遺産を数々の友人や親戚に支払うようにとの遺言を残した。この義務を果たすことが出来なかった2代チップendaleは、残念なことに1804年に破産宣告されてしまった。⁽¹⁰⁸⁾

1804年に開かれた管財人による4度にわたる公開競売の広告は2代チップendale工房の真の姿を伝える貴重な資料である。その他の貴重な資料は、1803年にサン・ファイヤー保険が注釈として記したセント・マーチンズ・レーンの工房レイアウト図である。(図5) この倒産の後にも彼は同じセント・マーチンズ・レーンに1813年まで住み続け、家具工房

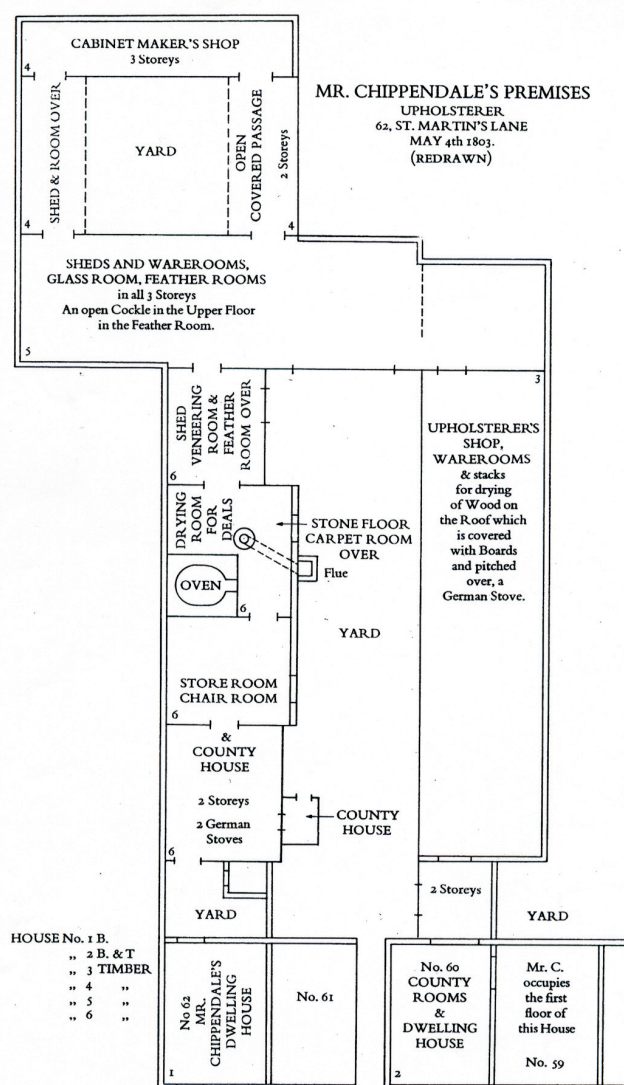


図5 椅子張り職人トーマス・チップンデールの建物
セント・マーチンズ・レーン 62 番地 1803 年 5 月 4 日

具」とある。ここで「モダン」とチップペンデルが呼んでいるのは、後に「ロココ」と名付けられた様式のことである。この本はまず「建築の5つの古典オーダーと透視図法」についての説明から始まる。そしてその説明に対応するページに、「最も困難な突起部材を彫刻する際に必要な適切な指導を寸法入りの大きなデザイン画」で示している。それに続いて書棚、コモード、ライティングテーブル、ビューロー、椅子、セティー、ソファ、ベッド、盆入タンス（Clothes-press）、衣装用引出タンス、その他の装飾品などの図版が見られる。この「指導書」のもう一つの特徴としてチップペンデルが表紙に記していることは、「現在のテイストを改善し洗練するために、また、あらゆる人生の段階にある人々の嗜好と状況に合わせるために考えられている」という点である。この初版では、トーマス・チップペンデルは自身のことを箱物家具職人（Cabinet-Maker）とだけ呼んでいる。⁽¹¹¹⁾

を続けた。当時このような災難は日常的であり、彼の評判は落ちなかったようである。その後彼は何度か住まいを変えた。彼の遺言は 1822 年 12 月 22 日に記されている。彼は生涯独身者として世を去った。⁽¹⁰⁹⁾

2 紳士と箱物家具職人のための
指導書 (The Gentleman &
Cabinet-Maker's Director)

1754 年の「紳士と箱物家具職人のための指導書」が出版される以前は、家具職人は単なる商売人としてしか認識されていなかった。その家具職人が建築専門家の出版した贅沢な製本に匹敵する 161 枚の図版からなるデザイン画集を出版したのである。かなりの驚きをもって迎えられたことであろう。⁽¹¹⁰⁾

中表紙には「ゴシック、チャ
イニーズ、モダン・テイストの
最も優雅で実用的な家庭用家

この「指導書」の購入者は貴族、紳士階級を始め、ほとんどが同業者であった。また学者、書店主なども含まれていた。そして 1755 年に出版された第 2 版では変更はほとんど見られなかった。初版と第 2 版はノースアンバーランド伯爵に捧げられたが、伯爵は真の後援者にはならなかった。⁽¹¹²⁾

1759 年 7 月にインス&メイヒューによって出版された「家庭用家具のユニバーサル・システム」(Universal System of Household Furniture)に対抗するために、同年一部前倒しで発行された第 3 版(改訂版)は 1762 年に完成した。第 3 版はウィリアム・ヘンリー皇太子殿下(His Royal Highness Prince William Henry)に捧げられた。そして 1764 年から 66 年にかけて殿下から家具の注文を賜った。この第 3 版はフランス語版も出版された。ロシアのキャサリン・ザ・グレートやフランスのルイ 16 世が購入した。第 3 版では初版と第 2 版の図版のほぼ半数が抜け落ち、新たに 106 の新しい図版が加えられた。そして図版は総数 200 枚に及んだ。⁽¹¹³⁾

第 3 版で新しく盛り込まれたデザイン画の装飾モチーフに新古典様式の影響が若干見られる。「ゴシック、チャイニーズ、モダン・テイストの」という表現の代わりに「最も流行のテイストの」という表現が用いられている。また内容は、椅子、ソファ、ベッド、カウチ、コモード、図書室テーブル、図書室用書棚、オルガン、盆入タンスなどの大型家具を始め、その他の細々とした日用品が並んでいる。今日の家具メーカーカタログのようである。この第 3 版ではチップendaleは自身のことを箱物家具職人(Cabinet-Maker) & 椅子張り職人(Upholsterer)と呼んでいる。これらの「指導書」は大きな成功を収めた。現在知られているほとんどすべての依頼はこれらの「指導書」の出版以降のものである。⁽¹¹⁴⁾

1920 年、ニューヨーク、メトロポリタン・ミュージアム・オブ・アートは、「指導書」初版原画のほとんどすべてと、第 3 版原画のかなりの枚数と、出版されなかったデザイン画をフォーリー家(Foley)から購入した。そしてチップendaleのものとされる家具デザイン画 144 枚をロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート・ミュージアム(V&A)が 1906-7 年に購入した。また 1862 年に V&A が購入したマティアス・ロック(Matthias Lock)の古文書の中に「指導書」のデザイン画が存在する。このことから「指導書」の原画にはマティアス・ロックやその関係者ヘンリー・コップランドなどのゴーストライターがいたとの推測があったが、数々の書簡の記述やカントリーハウスに残されている図面からチップendale自身がこれらの原画を描くことが十分可能であったと証明されている。さらにチップendale学会が購入した 6 点のペン&インクの原画は現在テンプル・ニューサムに展示されている。⁽¹¹⁵⁾

3 家具デザインの変遷 (Furniture Design)

初代トーマス・チッペンデルは1753年に初版の「指導書」を出版した頃、ゴシック、チャイニーズ（シノワズリー）、ロココ様式の家具をデザインしていた。そして1762年に第3版を出版する頃には、新古典様式の装飾モチーフを家具デザインに取り込み始めた。しかし、完全な新古典様式の家具をデザインするようになったのは、1760年代中頃以降、実際にロバート・アダムと共にカントリーハウスの仕事を請け負うようになってからである。しかも最初の内は「過渡期」(Transitional Period)であったので、どこことなくそれまで製作してきた様式の特徴を引きずっている印象がある。ロバート・アダムのデザイン画をそのまま製作した唯一の例として知られているのは、サー・ローレンス・ダundas准男爵 (Sir Lawrence Dundas, Bt) のアーリントン通り (Arlington Street) 19番地のためのソファとアームチェアのセットである。⁽¹¹⁶⁾ しかしこれも過渡期の作品である。そして1770年代以降は、フランス風の写實的突板寄木張り (Marquetry) の美しい新古典様式の家具を製作するようになっていった。2代チッペンデル工房での19世紀初頭の家具デザインはリージェンシー様式であり、ストアヘッド (Stourhead) には古文書に裏付けられた家具が現存している。⁽¹¹⁷⁾

4 家具ビジネスの規模と内容 (Furniture Enterprise)

1754年にセント・マーチンズ・レーンに新しく工房を開いた時には、60番地がチッペンデルの住まい、61番地が店舗、62番地がレニーの住まいだった。⁽¹¹⁸⁾ 2代チッペンデルの代になって火災保険証書の注釈に描かれた1803年の工房レイアウト図 (図5) によると、覆いが架かった通路を抜けると中庭に入り、その周りに会計室 (County House)、椅子組み室 (Chair Room) と在庫室 (Store Room)、カーペット室 (Carpet Room)、突板 (化粧) 張り室 (Veneering Room)、かなり広い椅子張り作業場 (Upholsterer's Shop) があり、更に奥に小さな中庭を囲んで、倉庫を兼ねた鏡室 (Glass Room) と羽根室 (Feather Room)、箱物職人の作業場 (Cabinet Maker's Shop) があった。尚、1803年には59番地の1階と62番地が2代チッペンデルの住まいであった。60番地は会計室と住まいとあるのでヘイグ氏がここに住んでいたと考えられる。そして61番地は店舗であった。

1767年10月1日にチッペンデルがサー・ローランドに宛てた書簡には、同日工房に届いたダマスクベッドの布地を染色した業者についての記述がある。この染織業者はロンドンで一番の腕であり、チッペンデルや職長が40回も催促に訪れたほど忙しい職人であった。チッペンデルの弁解はダマスクを最高品質に仕上げたかったためであった。⁽¹¹⁹⁾

1767年10月30日にチッペンデルがサー・ローランドに宛てた書簡の中では、作業の遅れを謝罪しつつ、その仕上がりはすべて彫刻師たち (Carvers) と金箔師たち (Gilders) の進み具合次第であり、楕円形の額縁が2日以内の荷馬車で届くことを期待していると

述べている。その為に酒代まで出したことも記されている。⁽¹²⁰⁾ このようにチップペンデールは工房の内部に専属の彫刻師や金箔師を置いていなかった。1803年に作成された工房のレイアウト図にも彫刻室と金箔室は見当たらない。また織物の染織も外注であった。このように受注した仕事の納期を下職が握っていたことは決して良い状況とは言えない。確かに、すべての職人を自社で抱えることには多くのリスクが伴う。しかし彫刻が重要な位置を占めていた18世紀中葉の英国家具工業界において、最重要部分を外注に頼っていた状況が果たして最善であったのかと疑問を感じる。チップペンデール工房のこのような状況に比べて、彫刻師から出発した家具職人ウィリアム・リネルの工房には彫刻室や金箔室があったことが1763年の財産目録から判っている。⁽¹²¹⁾

ところが1770年代になりチップペンデール工房でも本格的な新古典様式の家具を製作するようになると、フランス風の写実的突板寄木張り（Marquetry）を表面の化粧に用いて、その上に金メッキされた真鍮装飾金具（Ormolu）を付けるようになった。例えばヘアウッド・ハウスの図書室テーブルがこの例である。⁽¹²²⁾（図40）この図書室テーブルではほとんど木彫が見られない。この時点での最重要部分は突板張り工程と家具金物製造業者になった。彫刻は下火になったので、専門の彫刻師を抱えなくてもよくなったのである。デザインの流行によって必要な技術も変化するという例である。

さて、現在知られているチップペンデールのトレードカード（名刺）はチップペンデール＆レニーの1枚だけである。⁽¹²³⁾ このことが示唆することは、この名刺が使用された期間は極短く、1754年に「指導書」が出版されてからは、後援者（パトロン）やアダムなどの建築家の紹介によって家具製作依頼を受けていったということである。⁽¹²⁴⁾

1755年3月の火災では奥の箱物職人の作業場だけが燃えた。そして22台の道具タンスが焼失した。火災保険額3,700ポンドを掛けていたので、847ポンドの支払いがあった。また、流れの職人の工具に関しては保険が掛けられていなかったもので、広く義援金を募集したようである。これらのことから、1755年当時の工房の職人は、箱物家具職人、椅子張り職人、椅子組み職人、塗装職人などを合わせて40～50人程度であったとギルバートは推測している。⁽¹²⁵⁾ すでに初代チップペンデールは職人を統率する立場にあり、彼自身はデザイン、品質管理、外注管理、顧客打ち合わせ、工場管理全般の責任を負っていたと考えられている。⁽¹²⁶⁾ また1766年レニーの死後の競売と、1804年ヘイグの死後の競売にあたって発行された広告には、工房で扱っていたものを示す記述が見られる。

ところでチップペンデールは、自分の工房で製作した物を納品したばかりではなく、サー・ローランドへの書簡から判るように、自らの工房が忙しい場合や、特殊な技術が必要な場合には下職や外注先を使った。また、工房がただ単に仕入れた物を納めただけの場合もあった。そして、家具修理、家具掃除、家具移動、部屋の模様替え、家具レンタル、財産目録作成なども行った。その上、葬儀の飾り付けまでも請け負った。このようにカントリーハ

ウスやタウンハウスの室内装飾全般を任された。これは現在のインテリア・デザイナー、デコレーター、コーディネーターが行うような総合的な室内装飾業と考えられる。

以上のように、初代トーマス・チッペンデルと 2 代は家具職人というよりは家具デザイナーであり、家具工房のオーナー・経営者としての性格を強く持っていたことがわかる。18 世紀のロンドン家具職人ジョン・リネルについても同じことが言える。

5 顧客・後援者 (Clients & Patrons)⁽¹²⁷⁾

近年の研究の結果、納品明細書・請求書、帳簿上の支払い記録、銀行の台帳記録などの文書によって裏付けられた 70 を超えるチッペンデル工房の顧客・後援者（パトロン）が存在していたことが判明している。記録に残っている家具の多くはかなり以前に散逸してしまったが、チッペンデル工房製と公認されている家具は約 600 点存在する。これは同時代のライバル家具職人に比べてはるかに多い。⁽¹²⁸⁾

ジェームス・レニーがスコットランド人であったことから、初期の顧客の多くはスコットランドの貴族・紳士階級の人々であった。アルニストン卿 (Robert Dundas, Lord Arniston) のアルニストン・ハウス (Arniston House: 受注 1757)、アトホール公爵 (The Duke of Atholl) のブレア城 (Blair Castle: 受注 1758)、第 5 代ダムフライズ伯爵 (William, 5th Earl of Dumfries) のダムフライズ・ハウス (Dumfries House: 受注 1759-66)、第 14 代モートン伯爵 (James, 14th Earl of Morton) のダルマホイ (Dalmahoy: 受注 c.1759) などの家具調度品の依頼を受け、納品している。⁽¹²⁹⁾ 特にダムフライズ・ハウスには、チッペンデルの「指導書」期間のロココ様式の家具がほぼ完全に残されている。ダムフライズ・ハウスのために 1759 年に製作されたベッドは第 3 版の「指導書」に含まれている。⁽¹³⁰⁾ 2004 年 6 月 11 日の「カントリー・ライフ」(Country Life) の記事によると、現在の所有者ブート侯爵はこのカントリーハウスを売りに出している。スコットランド・ナショナル・トラストが建物と家具調度品の所有権を買い取るための基金を積み立てている。しかし更なる資金源が必要であるようだ。今後の推移を見守りたい。⁽¹³¹⁾

納品請求書と往復書簡が残されているノステル・プライオリ (受注 1766-85) の第 5 代サー・ローランド・ウィン准男爵、メルシャム・レ・ハッチ (受注 1767-79) のサー・エドワード・ナッチブル准男爵は有力な顧客であった。但しその支払いに対する姿勢は全く正反対であった。

ヘアウッド・ハウス (受注 1767-78) のエドウィン・ラッセル卿も多額の注文をした。サー・ローレンス・ダングラス准男爵のヨークシャーのアスク・ホール (Aske Hall) とアーリントン通り 19 番地 (受注 1763-66) には 1,123 ポンド 1 シリング 6 ペンスの納品をした。1765 年 1 月 17 日に 100 ポンド、同 7 月 17 日に 200 ポンド、1766 年 8 月 1 日に残金総額 823 ポンド 1 シリング 6 ペンスの支払い記録がある。⁽¹³²⁾ このようにチッペンデルは

郷里のヨークシャーとの関係を生かして多くの家具を納品した。

ロバート・アダムの子な建築・室内装飾作品にもチッペンデルは家具調度品を納品した。サー・ウィリアム・マーレイ勲爵、後の第1代マンズフィールド伯爵（Sir William Murray, 1st Earl of Mansfield）のケンウッド・ハウス（Kenwood House：受注 1769）、第1代ボーリントン卿（John Parker, 1st Lord Boringdon）のソルトラム・ハウス（Saltram House：受注 1771-72）、ウィリアム・ウェッデル氏（William Weddell）のニュービー・ホール（Newby Hall：受注 c.1772-76）などである。アダムは自分に家具デザインを要求しない施主に関しては、自身の新古典様式の室内装飾に似合う家具を製作できる信頼のおける家具工房としてチッペンデル工房を勧めたのではないかと考えられている。⁽¹³³⁾ さらに、サー・ペニンストン・ラム勲爵、後の第1代メルボルン侯爵（Sir Peninston Lamb, 1st Viscount Melbourne：受注 c.1772-75）のブロケット・ホール（Brocket Hall）とメルボルン・ハウス（Melbourne House, Piccadilly, London）にも家具調度品を納品した。

IV 図書室テーブルと肘掛椅子に関する古文書の記録（Archives）

1 図書室テーブルに関する書簡、納品明細書の記述

（Letters & Accounts for the Library Table）

1766 年末にはすでに完成していた図書室テーブルが、翌 1767 年 6 月末から 7 月始めにかけてノステル・プライオリに納品されたのは、アダムのデザインによる図書室の完成を待っていたためと考えられる。ハリス博士の前掲書に 1767 年のジェームス・アダムによる図書室の色彩計画図が掲載されている。⁽¹³⁴⁾ 図書室の室内装飾が完成したのは 1767 年になってからである。ところが、1766 年 12 月 27 日にチッペンデルがサー・ローランドに宛てた書簡には、もう大分前に完成していたこの図書室テーブルと盆入りタンスに関して、依頼主からの便りが無かったため、心変わりして不要と見なしていないかどうか心配しているとの記述がある。⁽¹³⁵⁾ チッペンデルの心配をよそに、この図書室テーブルはその半年後に納品されることになった。

また同じ書簡には、図書室テーブルと盆入りタンスの輸送方法についての記述がある。陸路便（Land Carriage）を使って送るよりは、料金が安価な海路便を希望しているサー・ローランドに対して、波を被って家具が痛む恐れや、海上の湿気が引出や錠に悪影響を与える恐れがあるとして、チッペンデルは陸路便を勧めている。⁽¹³⁶⁾ この他の書簡や納品明細書の中にも荷馬車便（Waggon）について触れる記述が多数見られる。18 世紀中葉のロンドン家具職人が地方のカントリーハウスの仕事を請け負うことを可能にしたのは、このように整備された交通網と輸送手段があったことを忘れてはならない。当時はロンドンからノステル・プライオリまで荷馬車便で約 1 週間程度かかっていたようである。⁽¹³⁷⁾ また、

幌付きの四輪大型馬車 (Coach) については、1771 年 12 月にサー・ローランドに 4 本の縁飾り (Border) を送った時と、1779 年 10 月にサー・エドワード・ナッチブル准男爵のメルシャム・レ・ハッチに石膏の壺と蓋を送った時の記述が残されている。いずれも小さな壊れ易いものの輸送に使用した。⁽¹³⁸⁾

更に細かい点であるが、チッペンデルはこの納品明細書をロンドンから発送する時点で記したことが判る。つまり発送時点発行・記帳である。その例として、1767 年 7 月 6 日にノステルの召使ヘンリー・アレンがサー・ローランドに宛てた書簡に、チッペンデルが 6 月 30 日に発送した「見せかけ本」(Sham Books) が未だ届いていないことが記されている。納品明細書の記述も 6 月 30 日である。⁽¹³⁹⁾ もう一つの例は、1769 年 10 月 18 日のチッペンデルの書簡に、2 週間前に発送した縁飾り (Border) がすでに到着していることを願うと記されているが、それに対応する品物は 10 月 2 日の納品明細書の「緑色と金箔の縁飾り 253 フィート、21 ポンド 1 シリング 8 ペンス、同 337 フィート、28 ポンド 1 シリング 8 ペンス」である。⁽¹⁴⁰⁾ 納品明細書は明らかに品物の発送時点を記録している。

ノステル・プライオリの古文書には 1766 年 6 月 23 日の納品書にも図書室テーブルの記述がある。⁽¹⁴¹⁾ 現在この記述の図書室テーブルが何処に消えたか定かではない。

本稿で着目している図書室テーブルが 1767 年 6 月 30 日の納品書に記された家具であるという根拠はこの納品明細書の記述そのものによる。

■ 1767 年 6 月 30 日

- ・非常に良質のマホガニー材を用いた大きな図書室テーブル、底部の両面に扉、内部は片方が引出、もう片方が仕切り板、非常に良く彫刻された先細柱脚にライオンの頭と爪による装飾、扉 (パネルドア) の表面に楕円形の彫刻、甲板は黒色革張り、全体として最も優雅に仕上がっている。: 72 ポンド 10 シリング⁽¹⁴²⁾



図6 ノステル・プライオリの図書室テーブル

この図書室テーブル製作から数年後に依頼主の代金不払いという仕打ちに遭ったチッペンデルであったが、この図書室テーブル製作中にはそのようなことは夢想だにしていなかったであろう。一般的に注文家具においては依頼主の予算によってその品質や仕上げを加減することがある。ギルバートが指摘しているよう

に、チップendale工房も例外ではなかったようだ。⁽¹⁴³⁾ その点を考慮しても、この図書室テーブルはチップendale工房の1767年当時の最高技術を集めて製作された逸品であったと考えて間違いない。これは竖琴の肘掛椅子についても全く同様である。

2 肘掛椅子に関する書簡、納品明細書の記述 (Letters & Accounts for the Armchairs)

1768年1月11日にチップendaleがサー・ローランドに宛てた書簡に、図書室の椅子および緑色の光沢あるカーテンとブラインドが完成し、金曜日の荷馬車便で送ると記されている。⁽¹⁴⁴⁾ これに対応する納品書は以下の通りである。

■ 1768年1月20日

- ・図書室用のマホガニー材の肘掛椅子6脚、アンティークな趣がある非常に高価な彫刻、緑色の馬毛織物で覆われた座。：36ポンド（1脚あたり6ポンド）⁽¹⁴⁵⁾

ここに記述されている肘掛椅子が本稿で着目している図書室の竖琴の肘掛椅子である根拠は、現存する図書室の肘掛椅子が6脚のセットであることである。現存する椅子の座は上記の記述と違う生地で張り替えられているが、オリジナルは緑色の馬毛織物で覆われていた。実はこの6本のうち2本は1992年7月9日のクリスティーズの競売で売却された（ロット番号30）。⁽¹⁴⁶⁾ 現在この肘掛椅子はノステル・プライオリに4本しかない。

ところでノステル・プライオリの古文書にもう一つ図書室用の椅子に関する記述がある。

■ 1767年7月4日

- ・マホガニー材の彫刻入り図書室用アンティーク肘掛椅子4脚、詰物入り、黒色革張り。：26ポンド（1脚あたり6ポンド10シリング）
- ・大きなマホガニー材の図書室用スツール、座が持ち上がり階段式梯子になる。詰物入り、黒色革張。：14ポンド⁽¹⁴⁷⁾

ここに記述されている4脚の肘掛椅子は革張りである。しかし、現存する肘掛椅子には革張りを張り替えたような跡はない。よって、この記述の椅子は現存する図書室の竖琴の肘掛椅子ではない。但し、ここに記述されているライブラリーステップは現存している。



図7 ノステル・プライオリ図書室の竖琴の肘掛椅子

3 図書室テーブルと肘掛椅子の価格 (Price)⁽¹⁴⁸⁾

これらの家具の価格は当時どのような意味があったのであろうか。2004年8月にテンブル・ニューサムを訪問したとき、ヨークシャーの数館の博物館、アートギャラリー、カ

ントリーハウスで、「召使と女中」(Maids & Maidens) という各館共通テーマの企画展が開催されていた。そこに大変興味深い資料の掲載があった。

テンプル・ニューサムの会計執事サミュエル・キーリング氏 (Mr. Samuel Keeling) がフランセス・シェファード嬢 (Miss Frances Shephard) に宛てた 1758 年 7 月 10 日の書簡に召使の賃金表がある。シェファード嬢はその数週間後の 8 月にチャールズ・イングラム卿 (Hon. Charles Ingram) に嫁ぎ、テンプル・ニューサムに女主人として住まおうとしていた。イングラム卿は 1763 年イルウィン子爵の称号を相続し、フランセスはイルウィン子爵令夫人となった。このキーリング氏の書簡は、彼女に一家の運営と具体的な家事の管理について知らせるために、結婚に先立って送ったものである。この書簡によれば使用人は 11 人の女性と 17 人の男性であり、彼らの賃金の合計は年間 233 ポンド 10 シリングであった。それとは別にテンプル・ニューサムの運営費は年間 2,175 ポンドかかっていた。使用人の賃金の内訳は以下の通りである。⁽¹⁴⁹⁾

【男性】		【女性】	
イルウィン卿付召使 1 名	£ 20-00-0d	女中頭 1 名	£ 15-00-0d
従僕 4 名	£ 26-00-0d	令夫人付女中 2 名	£ 13-00-0d
使用人頭 1 名	£ 8-00-0d	食料品貯蔵庫女中 1 名	£ 2-10-0d
料理人 1 名	£ 42-00-0d	洗濯室女中 2 名	£ 8-00-0d
番人 1 名	£ 10-00-0d	台所女中 2 名	£ 6-10-0d
農夫 1 名	£ 8-00-0d	酪農場女中 1 名	£ 3-00-0d
御者 1 名	£ 12-00-0d	女中 2 名	£ 5-00-0d
左馬御者 1 名	£ 5-10-0d		
助手 1 名	£ 6-10-0d		
馬子&少年 2 名	£ 12-10-0d		
庭師 1 名	£ 16-00-0d		
荷馬車係 1 名	£ 8-00-0d		
家禽類飼育係 1 名	£ 6-00-0d	以上合計	年間 £ 233-10-0d

1758 年のテンプル・ニューサムの賃金表と、1767 年 68 年のノステル・プライオリのチッペンデル工房からの納品明細書を比較すると、図書室テーブル 72 ポンド 10 シリングは、テンプル・ニューサムのイルウィン卿付召使に対する年間給与の約 3.6 倍に当たる。また、豎琴の肘掛椅子 1 脚当たりの価格は、令夫人付女中の年間給与に当たる。チッペンデル工房に特別注文した高級家具の価格の目安としては判り易い比較である。21 世紀初頭の英国や日本における特別注文家具もやはり高額であるが、当時最先端の流行の室内装飾

に合わせての特別注文であれば尚更であったと考えられる。

もう一つ興味深い点は、ジョン・リネル工房で製作され、シャルデロースに納められた竖琴の肘掛椅子2本で5ポンド10シリング（1本当たり2ポンド15シリング）は安すぎるということである。リネルの竖琴の肘掛椅子も、チッペンデールの竖琴の肘掛椅子も、品質、デザインにおいて何ら遜色がないはずである。しかし同じように装飾された肘掛椅子でありながら価格が倍以上も違う。これはリネル工房が何らかの理由で竖琴の肘掛椅子2脚を安価にシャルデロースに納品しなければならなかったからであろう。そしてこの価格がキャンセル品処分価格であった可能性は否定できない。現在英国の家具処分価格は通常価格の1/2が基本である。処分価格は元々かかった費用だけでも取り戻すという価格である。これは前稿での論者の推論を裏付けるものである。すなわちシャルデロースに納められたリネル工房の竖琴の肘掛椅子2脚は、オスタリーのイーティング・ルーム用に製作されたが依頼主が背の革張りを希望したためにキャンセルになったものと考えられる。⁽¹⁵⁰⁾

4 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵と令夫人の肖像画（Conversation-piece）



図8 第5代サー・ローランド・ウィン准男爵と令夫人の肖像画

現在ノステル・プライオリの図書室に飾られている第5代サー・ローランド・ウィン准男爵と令夫人サビーヌの肖像画は、1767年から69年にかけてヒュー・ダグラス・ハミルトン（Hugh Douglas Hamilton）によって描かれたものであることが判明している。⁽¹⁵¹⁾ この絵画は

「カンバセーション・ピース」（Conversation-piece）と言われている。この絵画の背景に描かれたノステル・プライオリの図書室は、実際の大きさの2倍になっている。アラスティール・レイング（Alastair Laing）は「1つのキャンバスに描かれた2つの全身肖像画：32ギニー（33ポンド12シリング）」⁽¹⁵²⁾ という「2つの肖像画」が元々の依頼であったため、背景を2倍にして描いたのではないかと考察している。⁽¹⁵³⁾ この絵画はサー・ローランドのタウンハウスに飾ら

れていた。アダムらによって室内装飾作業が進められていた自身のカントリーハウスを友人たちに自慢したのではないかと考えられている。

ここに描かれた図書室の家具に関する考察は第7章、第3節で述べることとする。

V 装飾モチーフ (Decorative Motifs)

1 図書室テーブルの装飾モチーフ (Decorative Motifs applied for the Library Table)



図9 図書室テーブルの装飾モチーフ

1) 先細柱脚 (ターム : Term) (図9、図10、図11、図13)

先細柱脚 (ターム) とは元々、下に行くほど先細りの形状をしたペDESTAL (台座) を指す。一般に上部は神話の登場人物、人間、動物などの頭部と胸部を持ち、下部は逆四角錐の柱である。古代ギリシャではギリシャ神話に登場するヘルメスの像が使用され、マイルストーンや境界石として使用された。ルネッサンス期には庭の装飾としても使用された。そしてバロック様式、ロココ様式の家具にも使用された。キャンドル立てのような台座そのままの場合もあれば、テーブルやキャビネットの脚部分の装飾モチーフとしても用いられた。⁽¹⁵⁴⁾ 尚、この後の新古典様式の家具には先細柱脚はほとんど見られなくなる。この図書室テーブルの扉部分に見られる先細柱脚は全部で12本ある。その正面には、ライオ

ンの顔、ハスク、爪が彫刻されている。また側面にはパテラとハスクが彫刻されている。

2) ライオンの顔と爪 (Lion's Mask & Paw) (図 9、図 10、図 11、図 13)



図 10 先細柱脚とライオンの顔

ライオンは「百獣の王」であり、力、勇気、誇り、不屈の精神、威厳の象徴である。古代中近東の神話ではライオンは悪からの守護という意味があり、ドア枠上部、窓枠上部、アーチ門の中央に彫刻されたライオンの顔が飾られていた。また中世キリスト教においては、羽根の生えたライオンは聖マルコの象徴であった。そして 18 世紀初頭、特に 1720-35 年は「ライオンの時代」として知られている。英国風パラディオ様式初期に当たるこの時期、ライオンの顔、爪、毛皮が椅子の両肘や前脚に繰り返し用いられた。ライオンの爪は家具の脚部に用いられることが多く、ライオンの顔のモチーフと一緒に用いられた。建築的にはライオンの顔にリングを付けてドアノブやドアノックとして使用されたこともあった。

しかし新古典様式の時代になるとこのライオンのモチーフは影をひそめた。その後リージェンシー様式になるとライオンはエジプト猫のような形で表現されるようになった。更に 19 世紀ヴィクトリア女王の大英帝国の関連施設には勝利を象徴するライオンのモチーフが再び頻繁に用いられるようになった。⁽¹⁵⁵⁾ この図書室テーブルでは、それぞれの先細柱脚に一頭分のライオンの顔と片脚分の毛皮付き爪が見られる。これらは全部で 12 ヶ所ある。チップendale がこの図書室テーブルにロココ様式以前の装飾モチーフであるライオンの顔と爪を用いたことは非常に不思議である。

3) スクロール (渦形 : Scroll) (図 10)

スクロール (渦形) はルネッサンス様式以降、建築・室内・家具装飾でよく使用されたモチーフのひとつである。S 型スクロール (S-scroll) はエリザベス様式、ジャコビアン様式、王政復古様式、17 世紀バロック様式、英国風パラディオ様式の家具に多く見られる。椅子においては肘掛、肘受、脚部に使用された。C 型スクロール (C-scroll) は主にロココ様式のカトーシュ (Cartouche) などに多く見られる。⁽¹⁵⁶⁾ この図書室テーブルにおいては先細柱脚の上部に C 型スクロールのモチーフが施されている。まるで先細柱脚が甲板

を支えているような視覚的効果が得られている。

4) ハスク (Husk) (図 9、図 10、図 11、図 13)

ハスクとは釣鐘草 (Bluebell) の花のようなモチーフが垂直方向に連なったもので、下に行くほど花模様の大きさが小さくなっていくものが多い。^{はなびら} 花卉の数は通常 3 枚で構成されている。新古典様式の家具に多く見られる装飾モチーフのひとつである。⁽¹⁵⁷⁾ この図書室テーブルでは、先細柱脚正面のライオンの口が 3 枚の葉で構成されたハスクを^{くわ} 銜えている。その上部の C 型スクロールの正面には、やや抽象化されたハスクが見られる。この抽象化されたハスクは扉表面のフェストゥーンや輪飾りに用いられているものと同じ形のハスクである。先細柱脚側面のパテラの下にあるものは花卉が 2 つしか見えないが、ハスクの一種と考えられる。

5) フェストゥーン (Festoon) / スワッグ (Swag) (図 9、図 11、図 13)

フェストゥーンとは果物、花、布が水平方向に結ばれて、尚且つ中央が垂れ下がるように湾曲した形になっている装飾モチーフであり、その両端は背景や輪などに固定されている。通常、布だけのフェストゥーンをスワッグと呼ぶ。⁽¹⁵⁸⁾ この図書室テーブルでは扉表面の上部に 2 連のフェストゥーンが見られる。また妻手側の上部にも 4 連のフェストゥーンが見られる。これらは彫刻した部材を貼り付けたものである。C 型スクロールや輪飾りに彫刻された花卉と同じ形の花がこのフェストゥーンにもあしらわれている。また、両端を固定する部分にはパテラの彫刻が見られる。



図 11 袖箱の扉表面の装飾

6) 輪飾り (Wreath, Garland) とリボン (Ribbon) (図 9、図 11)

月桂樹、オーク、オリーブの葉の輪飾りは古代ギリシャ・ローマで皇帝、英雄、スポーツ選手、詩人の功績を称えるための冠や首飾りであった。果物、豆などが葉の間に散らばっている場合もあり、リボンで巻かれることもあった。このモチーフはその人物の主権、名誉、栄光、勝利などを表すものとしてルネッサンス

期以降用いられた。フランスのアンピール様式ではナポレオンが好んで使わせた。輪飾り単独の場合もあれば、肖像の周りを囲む場合もあった。⁽¹⁵⁹⁾ この図書室テーブルの4枚扉の中央に単独で用いられた4つの輪飾りからは、依頼主サー・ローランドを称えている印象を受ける。またこの輪飾りは釣鐘草の花がモチーフになっている「花輪飾り」になっている。通常のアカンサスの場合は釣鐘草の花が上から下に向かって垂れ下がっている。しかしこの「花輪飾り」は釣鐘草の花が左右それぞれ下から上に向かって伸び上がっている。下部はリボンで結ばれ、最上部では左右の花弁が接している。リボンが下部にあり花弁が上に開いているので自然な印象を受ける。

7) アカンサス (Acanthus) (図 9、図 11、図 13、図 26)

アカンサスとは、地中海地方産ハアザミ属の植物の総称である。古典様式の建築ではコリント式やコンポジット式の柱頭にアカンサスの葉飾りが見られる。英国風パルディオ様式、ロココ様式、新古典様式、リージェンシー様式の家具調度品にもこのアカンサスが多く見られる。⁽¹⁶⁰⁾ この図書室テーブルでは台輪の4枚扉下部および妻手側板下部、2本のライオンの爪に挟まれた中央部分にアカンサスの葉飾りが用いられている。かなり控え目な用い方である。そして中央のアカンサスの両端から左右のライオンの爪に至る円弧がこの重厚な図書室テーブルの足元に軽やかな印象を与えている。アカンサスを挟む2つの円弧のおかげで、図書室テーブル左右の袖箱が、四隅のライオンの爪に支えられて床から持ち上がっている印象を受ける。実は、この袖箱の台輪内部には巨大なキャスターが付けられていて、図書室テーブルの移動が楽になっている。もしこの台輪が「指導書」第3版、第83番の図版(図 39)に見られるような袖箱下部を全部覆ってしまうものだったら、カーペットなどの若干の凹凸が障害となって移動が妨げられたことだろう。しかしこのように台輪部分を意匠的に持ち上げることによってこの障害を上手く取り除いている。また袖箱台輪内部の空気の循環を保ち、台輪内部の木材の状態をよく保っている。この台輪部分のデザインは機能性を十分に考慮したものとなっている。

8) パテラ (Patera) / ロゼット (Rosette) (図 9、図 10、図 11、図 13)

パテラとは平たい円形または楕円形の装飾モチーフで、中央に定型化されたバラなどの花、アカンサスの葉、放射状模様が施されたものである。特に定型化されたバラの花模様を持つ円形または楕円形の装飾モチーフをロゼットと呼ぶ。18世紀のパテラはいつもロゼットであったことから、二つの呼び名は置換え可能なものとして使用された。⁽¹⁶¹⁾ この図書室テーブルでは3種類のパテラが見られる。一番大きなものは先細柱脚のライオンの顔の両側面に彫刻されている。次にフェストゥーンの両端にも同じ形状のパテラが見られる。双方とも中央部分が盛り上がり、先の尖った花弁を8枚持っている。更に

扉表面を横に走るギロシュの円弧の中央に4枚花卉のパテラが見られる。

9) ギロシュ (Guilloche) (図9、図10、図11、図13)

ギロシュとは2本以上の帯が連続した波形を描きながら交互に重なり合う模様である。2本の帯で囲まれた中央の円形部分にはロゼットや半球があしらわれることがある。古代ギリシャ建築のフリーズの装飾に用いられたモチーフであったが、16世紀中頃以降は家具や金属製品にも施されるようになった。⁽¹⁶²⁾ この図書室テーブルの扉表面にはライオンの顔の間を水平方向に走る横木がある。その表面にギロシュが彫刻されている。通常のギロシュでは2つの波形が織りなす円形部分の大きさは均一であるが、この場合は大小2つの円形部分が見られる。そして大きな円の中央に4枚花卉のパテラが見られる。

10) ロカイユ (Rocaille) (図9、図12、図29)



図12 中央部分の引出

ロカイユ (Rocaille【仏】岩模様、Rockwork) もしくはムッシェルヴェルク (Muschelwerk【独】貝殻模様、Shellwork) は、ロココ様式の最も重要な装飾モチーフのひとつである。元々ベルサイユ宮殿の庭の人工的な洞穴 (Grotto) の岩模様に影響された貝殻やいびつな形の岩の装飾モチーフである。このロカイユという言葉をもっとも最初に使ったジーン・モンドン (Jean Mondon) は、ロカイユを最も多くデザインした人物の

ひとりであった。彼の作品は1736年にパリで出版され、1750年代にドイツ、アウグスブルクで繰り返し再版された。英国にこのロカイユが伝わったのは1740年代になってからである。⁽¹⁶³⁾ 実はこの図書室テーブルの中央の引出把手にロカイユが見られる。このデザインの把手を選んだことは、この時点でのチップendaleが未だロココ様式から抜け出していなかったことを示している。尚、ハミルトンの肖像画の図書室テーブルにも現存しているものと同じ形状の把手が描かれている。(図48)



図13 図書室テーブル側面

11) ビーズとリール (Bead and Reel) (図 13、図 12)

数珠のような玉飾りと細長い糸巻き棒が交互に現われる装飾モチーフのことをビーズ&リールと呼ぶ。⁽¹⁶⁴⁾ この図書室テーブルの妻手側板にある【○】模様の突起部分にこのビーズ&リールが施されている。同じ【○】模様は中央の引出表面にも施されているが、こちらは単調な突起部材だけとなっている。

2 肘掛椅子の装飾モチーフ (Decorative Motifs applied for the Lyre-back Armchairs)



図 14 竖琴の肘掛椅子の装飾モチーフ

1) 竖琴 (Lyre) (図 14)

竖琴は S 字に曲がった動物の角のような形のフレーム一對を線対称に組み合わせ、その上下垂直方向に弦を張ったものである。新古典様式の家具の装飾モチーフとして多く見られる。⁽¹⁶⁵⁾ この肘掛椅子の竖琴の弦は 5 本張られている。ノステル・プライオリに納品されたこの竖琴の肘掛椅子はチップendale 自身がデザインしたと考えられている。よってこの竖琴の形状もチップendale のオリジナルデザインであると考えて差し支えないだろう。尚、この肘掛椅子と酷似しているデザインの竖琴を背もたれにあしらった肘掛椅子が第 1 代メルボ

ルン侯爵のブロケット・ホールにチップendale 工房によって納品された。(図 44) また、オスタリー・パーク・ハウスにはジョン・リネル工房によって、イーティング・ルーム、図書室、朝食室に 3 種類の異なったデザインの竖琴の椅子が納品された。特にイーティング・ルームの竖琴の椅子はロバート・アダムのデザイン画からリネル工房が製作したものである。⁽¹⁶⁶⁾

2) パテラ (Patera) / ロゼット (Rosette)

この肘掛椅子には大きく分けて2種類のパテラがあしらわれている。第1は円形のパテラであり、第2は楕円形のパテラである。

(1) 円形パテラ (Circular Patera) (図14、図15、図16、図17、図18)

円形パテラは8枚の花弁を持っていてどれも同じ形状のものである。またこれは図書室テーブルにあしらわれているものとほとんど同じ形状のものである。どれも中央部分が盛り上がっていて、周囲に向かってなだらかに傾斜している。先が尖った8枚の花弁は均等に配置されている。

しかし、使われている箇所によってパテラの周囲の装飾が異なっている。第1に竖琴の根元(計2個)(図15)と両肘の先端両面(計4個)(図16)に施されているパテラは周囲をととても小さな数珠飾り(ビーズ)で囲まれている。第2に座枰前面(計14個)(図17)と両側面(計10個×2)のフリーズに施されているパテラは上下を向いた釣鐘草の花(ハスク)によって挟まれている。第3に両肘が背柱と接合する付根の部分(計2個)(図18)に施されたパテラは周囲を円形の帯で囲まれている。



図15 竖琴の根元と台座

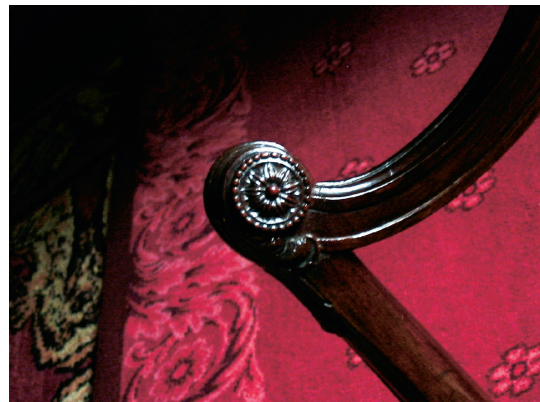


図16 肘の先端部分



図17 座枰正面フリーズ部分と前脚付根部分



図18 肘と背柱の接合部分

(2) 楕円形パテラ (Oval Patera) (図 14、図 17、図 19、図 20、図 22)

まず、楕円形の大きなパテラは弓形のトップレールの中央に施されている。先の尖った花卉の数は 24 枚あり、12 枚に 12 枚が重なって表現されている。このパテラも中央部分が盛り上がり、周囲に向かってなだらかに傾斜している。そして周囲は小さな 40



図 19 トップレール中央部分

楕円形のパテラが見られる。これは中央が盛り上がり、周囲に向かって花卉がなだらかに傾斜しているように見えるが、実は溝彫りをすることによって花卉のように錯覚させているものである。この溝彫りは 16 本ある。この擬似パテラが見られる箇所は前脚の前面と外側側面および後脚の外側側面だけである。すなわち、前脚 2 面 × 左右 2 本 + 後脚 1 面 × 左右 2 本 = 合計 6 個である。

3) ハスク (Husk) (図 14、図 15、図 17、図 21)

この肘掛椅子では、まず竖琴のモチーフの中に 2 つのハスクが見られる。一つ目は竖琴の根元にある 2 つにパテラの間小さな釣鐘草の花が見られる。パテラの周囲を飾る円形の数珠が水平方向の短い数珠でお互いに結ばれている。ハスクはこの短い数珠から垂れ下がるように飾られている。もうひとつのやや大きな写実的なハスクは竖琴の台座部分を飾る左右のアカンサスの間に彫刻されている。(図 15) それから座枠の



図 20 肘受と座枠接合部分

フリーズ部分には、パテラを交互に挟むように配されているモチーフがある。これは中央の半球から上と下に花卉を向けた釣鐘草の花を組み合わせたものである。(図 17) さらに両肩に彫られたアンセミオンの花卉の先に極小のハスクが見られる。(図 21) このようにこの椅子は、多くのパテラやハスク、アンセミオンという花のモチーフで華々しく飾られ

た椅子である。

4) 雷文 (Greek Key Pattern, Fret) (図 14、図 20)

フレット (Fret) とは水平方向と垂直方向の線が直角に相交わることによって形作られる帯状の模様である。古代ギリシャ建築に使われた装飾であったので、ギリシャ風の鍵の図案 (Greek Key Pattern) とも言われる。⁽¹⁶⁷⁾ 英国風パラディオ様式のウィリアム・ケントがデザインした家具にも見られ、18 世紀初頭からよく使われるようになった装飾モチーフである。また日本語では雷文の呼び名で親しまれている装飾である。この肘掛椅子では肘受が座枠に接合する部分のやや大きな正方形の表面に雷文が彫刻されている。

5) アンセミオン (Anthemion) (図 14、図 21)

アンセミオンとはギリシャ語で花を意味した。ギリシャ建築ではコーニスやイオニア式柱頭の首の部分に巻きつけられた建築的装飾のことであり、水平方向に連続して用いられ



図 21 左肩部詳細

ただけであった。中央に向かって閉じている形のはスイカズラの花 (Honeysuckle) を表している。⁽¹⁶⁸⁾ この肘掛椅子の両肩にアンセミオンが見られる。両肩から中央に向かって斜め下を向いている。かなり自由なモチーフの使用方法である。一見すると貝殻模様に見間違えるが、確かにアンセミオンである。この時点でチッペンデルがロココ様式の装飾から確かに脱して新古典様式の装飾を果敢に取り入れようとしていたことが窺える。

6) 溝彫り (Fluting) (図 14、図 22)

浅い半円の断面を持つ垂直方向に並行した溝彫りは、古典建築の柱や付け柱の表面に施された装飾である。⁽¹⁶⁹⁾ この肘掛椅子では先ず竖琴の基底部分に 7 本の溝彫りが見られる。また、先細の 4 本脚すべてに溝彫りが施されている。この溝彫りにはそれが施された対象をより細く見せるという視覚的効果がある。この肘掛椅子は物理的にかなりの重量があり、視覚的にも種々の装飾によって重たい印象がある。しかし溝彫りが施された先細脚によって全体としては軽やかな印象に仕上がっている。

ところで肘受にも溝彫りが見られるが、その断面の中央部分が盛り上がっていて、18 世紀初頭の様式の特徴が残されたものになっている。この後ブロケット・ホールに納品さ

れた豎琴の肘掛椅子においては、肘受正面の表面をもっと平らにして、そこに溝彫りを施している。(図 44)

7) アカンサス (Acanthus) (図 14、図 15)

この肘掛椅子では、豎琴のフレーム自体にアカンサスの彫刻が施されている。また豎琴の台座の左右にも曲面に沿ってアカンサスの彫刻が見られる。いずれもかなり控え目な用い方である。このようなアカンサスの控え目な用い方の中に、18 世紀前半の度を過ぎた装飾を脱して、新古典様式を吸収しつつあったチッペンデールの姿を垣間見ることができる。

8) 弓形トップレール (Bow-shaped top-rail) (図 14)

「指導書」の図版に描かれたロココ様式の椅子のトップレール (笠木) はほとんど弓形になっている。これが「指導書」出版当時のチッペンデールのデザインに見られる特徴のひとつである。この肘掛椅子はこの流れを汲んでいる。しかし、中央に彫刻された大きな楕円形のパテラ、左右の両肩に彫刻されたアンセミオン、そして縁に残された紐の彫刻だけがある簡素なデザインになっている。「指導書」時代のデザインと異なってきている。

9) ローレルとビーズ (Laurel and Bead) (図 14、図 22)

ローレルとは月桂樹の葉を重ね合わせた装飾モチーフである。月桂樹で編んだ冠はギリシャ・ローマ時代には勝利の栄冠を意味した。この月桂樹の装飾は新古典様式の建築と室内装飾において再び取り上げられ、主に突起部材の表面を飾る装飾として利用された。⁽¹⁷⁰⁾ この肘掛椅子では脚の上半分にこのローレルの装飾が見られる。上向きに束ねられた月桂樹の葉と下向きに束ねられた月桂樹の葉を、数珠で飾られた帯によって締めるという形になっている。そして脚の下半分には溝彫りが施されて細身になっている。更にその下には数珠で飾られたもう 1 本の帯があり、接地箇所にはカボチャのような爪先が付いている。あまりに建築的すぎるといふ批判があるが⁽¹⁷¹⁾、チッペンデールは新古典様式の装飾

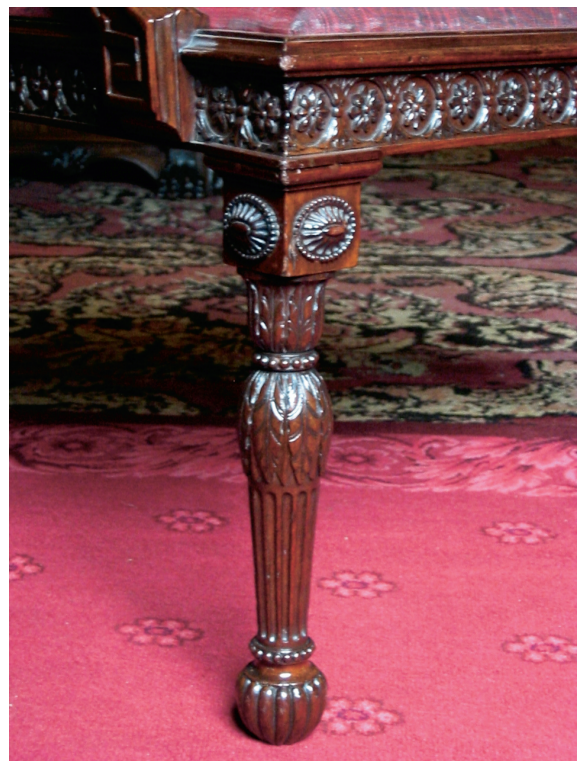


図 22 前脚部詳細

をととても巧みに適用したと論者は考える。特にローレルを上向き下向きに脚に巻き付けて数珠の帯で絞り、あたかも人間の腿と脰もも ふくらはぎに見立てたようなデザインは非常に興味深い。

3 天井と壁の化粧漆喰装飾、造作書棚の装飾、置き家具の装飾の調和 (Coordination)

この図書室の室内装飾はアダム兄弟によって設計された。勿論壁面の造作書棚もアダムのデザインである。⁽¹⁷²⁾ しかし現在のところこの造作書棚を誰が製作したのかは判っていない。この造作書棚は図書室の4面全部を取り巻いている。東側中央には暖炉があり、その左横にビリヤード室へのドアがある。また右側のドアの後にはメダルキャビネットが隠されている。そして南側にはタペストリー室へのドアがある。この南側のドアの図書室側表面には全部で81冊の「見せかけ本」(Sham Books)が張られている。この「見せかけ本」はチッペンデールが1767年6月30日に発送したものである。⁽¹⁷³⁾ この図書室には西側に



図23 インナーシャッターの装飾

だけ2つ窓がある。この窓にはインナーシャッター（室内側に取り付けられた板戸）がある。この室内側板戸を開けると壁の厚み部分に格納され、その表面は室内側に露出する。閉めた場合外側に面するこの板戸の表面にも、他の室内装飾と似合うように装飾が施されている。(図23) ここにパテラや溝彫りが見られる。

造作書棚の腰板突起部（デイドー：Dado）にパテラと上下向きハスクが交互に並んでいる装飾が見られる。肘掛椅子の座枠のフリーズに彫刻されているもの

のとはぼ同じである。但し造作書棚の腰板突起部のパテラは6枚のねじれた花卉であるが、肘掛椅子のパテラは8枚の先が尖った真っ直ぐな花卉である。

造作書棚のフリーズ部分と壁の化粧漆喰にはアンセミオンとパルメットの交互配置が見られる。肘掛椅子の両肩にあしらわれたアンセミオンと呼応している。(図3)

天井の化粧漆喰には雷文が見られる。(図24) これも肘掛椅子の肘受と座枠接合部に施された雷文と呼応する。また、天井の化粧漆喰に小円盤 (Roundel) がいくつかある。そこにツッキは古代神話を題材にした絵画を幾つも描いた。それらの絵画の中に竖琴を奏でる人物がたくさん描かれている。6本の肘掛椅子の背もたれにあしらわれた竖琴の装飾モチーフとよく呼応している。

1766年末にすでに完成していた図書室テーブルには室内装飾と呼応する装飾モチーフはほとんど見られない。チッペンデールは頭の中で新古典様式の装飾は何かと模索してい

たのではないだろうか。しかし、1768 年 1 月にチップendale 工房から発送された肘掛椅子の装飾にはアダムの新古典様式の室内装飾と呼応する点が多く見られる。このようにチップendale は、アダムの造作書棚や天井・壁の化粧漆喰に施された装飾モチーフをよく観察して、自身の家具デザインに巧みに取り入れたのである。



図 24 図書室天井隅の装飾

VI 材料と製作技術 (Materials and Techniques)

1 図書室テーブルの材料と製作技術

(Materials and Techniques applied for the Library Table)

1) 木材：マホガニー (Mahogany)、オーク (Oak)

マホガニー材は硬く重く耐久性のある木材である。この材料は家具製作に適し、無垢材のままでも突板にしても理想的な材料である。また大きなサイズの板材としての入手が可能であった。18 世紀初頭から英国家具産業界で使用され出し、当初はジャマイカ産のものが主流であった。そして 1740 年代後半までに西インド諸島、キューバ、ホンジュラス、メキシコなどの国々から輸入されるようになった。その後 19 世紀には西アフリカから輸入された。⁽¹⁷⁴⁾ 残念ながらチップendale の納品明細書には「非常に良質のマホガニー材を用いた大きな図書室テーブル」との記述があるだけでマホガニー材の産地までは記載されていない。

またこの図書室テーブルではオーク材も使用されている。中央部分の引出および扉内部の引出の側板、向板、底板はすべて無垢のオーク材で作られている。オーク材の特徴である斑が入っていることから判る。(図 29、図 31) オーク材は英国家具にとって何世紀にもわたって最も重要な木材であった。オーク材は無垢材のまま使用される場合もあれば、突板張りの下地材として使用されることもあった。また突板としても使用された。英国家具産業界で今日まで使用されてきたオーク材は大きく分けてヨーロッパ・オークとアメリカン・オークがある。ヨーロッパ・オークはイングリッシュ・オークとヨーロッパ大陸のオークに分けられる。イングリッシュ・オークは非常に重く強靱なため、どちらかと言えば建築材料として使用された。そしてバルチック・オークのようなヨーロッパ大陸のオーク材が家具や羽目板に使用された。一方アメリカン・オークはレッド・オークとホワイト・オークに大別される。⁽¹⁷⁵⁾ この図書室テーブルの引出内部に使用されたオーク材が果たしてヨーロッパ大陸のオーク材であったのかは定かではない。また扉や袖箱側板のマホガ

ニー材突板張り下地にオーク材が使用されたかどうかは今後の調査を待つこととする。

2) 突起部材 (Mouldings) と彫刻 (Carvings) (図 9、図 10、図 11、図 12、図 13)

第3章第4節で述べたように、チップペンデル工房内部には専属の彫刻師や金箔師がいなかった。したがってこの図書室テーブルのために彫刻された装飾はすべて外注に出されたものである。もちろん彫刻師にデザインを指示したのはチップペンデルにおいて他にいなかった。また仕上りを厳しくチェックしたのもチップペンデル自身であったはずだ。

先細柱脚とライオンの爪の組み合わせは、12本すべて外注先で彫刻されてきたものであろう。チップペンデル工房が良質のマホガニー材を大まかな形に木取りして彫刻師たちに支給して彫らせたと考えられる。扉部分のフェストゥーンと輪飾りは彫刻された部材を貼り付けたものである。フェストゥーンの下地には水平方向のマホガニー材の木目があるが、フェストゥーンの木目は明らかに方向が違っている。輪飾りについても同じことが言える。また、妻手側板上部のフェストゥーンも同じように貼り付けたものである。さらに、ギロシュ&パテラが彫刻されている水平方向の部材も後付けである。そして、台輪部分の紐とアカンサスの彫刻も台輪に後付けしたものである。また、中央部分の引出正面と妻手側板の【○】のモチーフを形作る紐やビーズ&リールの彫刻も後付けである。

これらの部材はすべて下職の彫刻師たちによって彫られた後、工房に納品されて工房内の箱物職人の作業場で、それぞれ所定の位置に接着されたと考えられる。

3) 突板張り (Veneering, Cross-banding) (図 9、図 10、図 11、図 12、図 13)

この図書室テーブルの外側に見える部分はマホガニー材が使用されている。その内、色々な彫刻が施された装飾部材、突起部材、甲板の縁、扉内部の引出前板、台輪はすべて無垢のマホガニー材を加工したものが使用されている。しかし、袖箱本体の側板、扉、中央部分の引出前板などにはマホガニー材の突板（化粧板）が張られている。

ベニアリング（突板張りまたは化粧板張り：Veneering）は無垢材を接ぎ合わせるだけでは得られない美しい木目を出すため、天然の木材を薄くスライスしたもの（突板または化粧板）を接着剤で下地材に練り付ける技法である。扉の輪飾りが取り付けられている部分は幾何学的突板寄木張り（Parquetry）である。特に輪飾りに囲まれた中心部分には非常に珍しい貴重な木目の突板が使われている。また中央部分の引出鍵穴周囲の丸い突板も珍しい木目である。このように木目の美を愛でるという習慣が洋の東西を問わずに存在していたことは注目に値する。また、袖箱の妻手側や椅子が入る内側の表面には、コストパフォーマンスを意識して単調な縦木目の突板が張られている。

バンディング（帯飾り：Banding）という技法は、装飾的な縁を施す技法のことである。突板を木目方向に長く用いる方法をストレート・バンディング（Straight-banding）という。

突板の木目方向に対して直角にカットしたものを並べて使用する方法をクロス・バンディング (Cross-banding) という。そして羽根が合わさるように突板を組み合わせる方法をフェザー・バンディング (Feather-banding) という。⁽¹⁷⁶⁾ この技法は、突板寄木張り (Marquetry, Parquetry) においても埋込寄木象嵌 (Inlay) においても見られる。

この図書室テーブルの中央部分の引出表面に施された周囲の縁飾りは、突板の木目方向に対して直角にカットしたものを並べて張り付けたものである。その延長上にある袖箱の側板の木口面にも同様のクロス・バンディングが見られる。通常隅に当たる部分は 45 度の「留め」になっている。また扉のフェストゥーンが取り付けられている部分も同様である。

突板張り仕上げの品質は下地の木材の状態によって異なってくる。特に永い年月を経過すると下地の木材の^{よじ} 振れ、反り、割れ、接ぎ切れなどが原因で表面に張られた突板までも割れてくることがある。残念ながらこの図書室テーブルの中央部分の引出前板表面と袖箱扉表面に突板の割れがある。この割れの方角性から下地材の方角が特定できる。近年では下地材の経年変化によって最表面の突板が割れないように、突板の下地を変化が少ない積層合板にする方法が採用されている。しかしこの時点では無垢の下地材に突板を直接張り付けていたことが判る。ヘアウッド・ハウスの図書室デスクにも同様の割れが見られる。(図 43) 1803 年のチップendale 工場のレイアウト図 (図 5) には突板張り室 (Veneering Room) が記載されている。この図書室テーブルの突板張りも工場の突板張り職人によってなされたと考えて差し支えないだろう。

4) 接着剤 (Adhesives: Animal Glues)

家具製作に古くから使用されていたのは動物性接着剤 (Animal Glues) である。日本の^{にかわ} 膠と同じで、煮沸した動物の骨、あら皮、血液、内臓などを固めたものである。この塊は熱することによって液状化して、フレームの組立、突板張りなどに使用された。最終凝固には 24 時間程度を要した。この接着剤の利点は温めるとその接着力がよみがえることである。動物性接着剤は骨から作られるものと、あら皮から作られるものとに細分されるが、ロンドンの家具職人は両方の接着剤を使用していた。⁽¹⁷⁷⁾ 間違いなくチップendale 工房でも接着剤に膠を使用していたものと考えられる。

5) 塗装 (Finish)

塗装は木材を膜によって保護し、その美しい木目を強調し、着色などで装飾するための大切な技術である。1730 年にフランスのマルタン兄弟が開発した擬似漆 “vernish Martin” に対抗して、1763 年にロンドンのスチーブン・ベドフォードが開発した擬似漆が当時の英国家具に使用された塗料であった。⁽¹⁷⁸⁾ マホガニー材は元々明るい赤色であるが、この

図書室テーブルの表面はとても暗い赤茶色に着色されていた。擬似漆であったと考えられる。しかし、扉裏側の突板や袖箱の側板内部の突板に塗られた塗装は、長期間陽が当たらなかったにも関わらず、かなり色が薄い。内部は塗装回数を減らしたものと考えられる。

ところで、引出内部の側板、向板、底板に用いられた無垢のオーク材には塗装が施されていなかった。現在生産されている18世紀英国家具の復刻品は引出内部、側板外側、底板裏側まで塗装をかけるものがほとんどである。しかし当時は引出内部を未塗装のままにした。日本の筆筒の場合、伝統的な品物も近代工業的な品物も、引出内部を桐の無垢材にすることが多い。それは桐の持つ防虫・調湿効果を生かすためである。それではなぜチッペンデール工房では引出内部のオーク無垢材を未塗装のままにしたのであろうか。コストパフォーマンスがその理由ではないかと考える。

6) 家具金物 (Fittings, Metal Work)

(1) 蝶番 (Hinges) (図 10、図 28)

ヒンジ (蝶番: Hinges) とは家具の部材を連結する部品であり、開け閉め、折り畳みを可能にする木製、金属製などの部品である。(179) この図書室テーブルでは扉の開閉にヒンジが用いられているが、これはピン式のヒンジである。扉の吊元の下にピンが埋め込まれていて、袖箱の台輪上面と甲板下面に開いている穴に挿入されることによって回転軸となっている。この図書室テーブルは2つの袖箱の上に、引出1段分が付いた甲板部分を乗せて組み立てる構造になっている。扉は袖箱と甲板を組み立てる途中に挿入された。ピン式のヒンジの場合、金具が露出しないので見た感じが美しいという利点がある。

(2) 把手 (Handles) (図 12、図 29、図 30)

この図書室テーブルには2種類の把手が使用されている。常に外側に見える中央部分の引出には装飾性に富むロカイユの形をした把手が使われている。この把手は金メッキを施した真鍮装飾金具である。扉内部に隠された簡素で実用的な引出には幅広でシンプルな把手が使われている。この把手は18世紀の一般的な家具の把手として広く普及していた。金メッキされた真鍮金具ではあるが、装飾性がないことから安価に生産されたものである。

実はこの図書室テーブルの扉には金属製の把手が付いていない。どのように開けるかというと、扉1枚に2本ある先細柱脚のうち、吊元と反対側に付けられている先細柱脚のライオンの顔を掴むことによってこの扉を開けるのである。(図 10、図 11)

(3) 錠 (Locks) と鍵 (Keys) (図 11、図 25)

この図書室テーブルにはS字の鍵を差し込む鍵穴が、中央部分の引出の真ん中と、左右の扉の輪飾り中央にある。いずれも同じ鍵が用いられたようだ。

引出の錠は上に持ち上がり、甲板下面に彫られた穴に差し込まれて鍵がかかる。扉の錠は長い門かんぬきになっている。扉をきちんと閉めると、扉裏に取り付けられた錠金具の先端に空

いた小さな穴に、袖箱の側板に取り付けられたフックが入る。そして錠の門が動いてフックにひっかかって鍵がかかるという仕組みになっている。

チッペンデルは1766年12月27日の書簡で、海路便にすると海上の湿気が引出や錠に悪影響を与える恐れがあると指摘している。彼が心配したのはこの錠であった。引出が痛むと考えた理由は、引出内部のオーク材が未塗装であったので湿気によって膨らんだり反ったりすると考えたのだろう。

(4) キャスター (Castors) (図 26)

キャスターは家具を移動させるための車輪が付いた部品である。英国ではすでに17世紀末までにはキャスターが使用されていた。ロンドンでは1690年までにキャスター製造卸業が確立していた。初期のキャスターは硬質の木製のものであり旋回できなかった。しかし1700年までには垂直軸が



図 25 図書室テーブルの扉の錠



図 26 巨大キャスター

付けられて旋回できるようになった。その直後、木製の球に金属の軸が通ったものが作られた。そしてすぐに木製ローラーに取って代わられた。更に1730年代までには木製ローラーは革製車輪に取って代わられた。そして車輪以外の木製部分は徐々に真鍮製になっていった。1770年代までには、大きく分けて3種類の完全な真鍮製キャスターが流通するようになった。その後19世紀には特許を取得した様々なキャスターが開発された。⁽¹⁸⁰⁾ この図書室テーブルの袖箱下部の台輪で隠された部分に、巨大なキャスターが取り付けられている。このキャスターは旋回ができる車輪まで真鍮製のものである。

(5) ネジ (Screws) (図 27、図 28)

ネジは17世紀後半から使用され出した。当初は鉄から手加工で製造されたので、ネジ山や頭の刻みが不統一であった。1760年頃、旋盤を一部使用したネジが生産されたが、手加工のものよりも傾斜が浅くネジ山が低い不十分なものであった。19世紀初頭になってからネジ山がしっかりしたネジが機械生産されるようになった。⁽¹⁸¹⁾

この図書室テーブルは組立式であるが、上下連結や、妻手側板に後付けされた先細柱脚

を固定するために頭が大きなネジが使用された。尚、ネジ頭はマイナスである。

7) 組立式の構造 (Structure) (図 27、図 28)

この図書室テーブルは両袖 (2 つの袖箱) の上に、引出 1 段分が付いた甲板部分を乗せて組み立てる構造になっている。扉内部の最上段の引出は甲板に付いている。また中央部分の引出も甲板に付いている。袖箱のクロス・バンディングされた側板木口が切れていることが確認できる。この位置で上下の部材が分割されていることを示している。(図 28) そして扉は袖箱と甲板を組み立てる途中で挿入された。

また、妻手側にある先細柱脚は後付けである。甲板と左右の袖箱が組み上がった後に、

先細柱脚をネジで袖箱の内側から固定する方法が採用された。これは妻手側の先細柱脚が上下に分割されないための処置であった。袖箱側板内部にはこのネジ頭用の大きめの穴が座ぐりされている。(図 28)



図 27 図書室テーブル扉内部 (パーテーション側)

ヘアウッド・ハウスに納品された図書室テーブルも 3 分割構造になっている。この当時の両袖の図書室テーブルは皆このような 3 分割構造であった。(図 40)

8) 扉 (Panel Doors) (図 11、図 25、図 27)

この扉表面には幾何学的突板寄木張りが施されているので、扉自体の構造を知るためには扉の裏側を観察しなければならない。裏側には、上端と下端にマホガニー材無垢の横桟が入っていることが確認できる。また左右の縦方向の縁にマホガニー材無垢の面材が練り付けられている。そして裏面中央部分はマホガニー材の突板張りである。

前述のように扉表面の突板には縦方向に割れが入っている。(図 11) そこで扉の下地材は縦方向に接ぎ合わされた無垢材 (多分オーク材) であることが判る。

9) パーテーション (Partitions) (図 28)

両袖箱の片側は総引出になっている。反対側は上部に引出が 1 段あるだけで、下部はパーテーション (中仕切り板) になっている。そしてパーテーションを挿入するための溝が 13 本等間隔で彫られている。これらのパーテーションは可動式になっていて、用途に応



図 28 パーテーション

じて位置を変えることができる。

このパーテーションの形状が興味深い。中央部分が盛り上がった弓形をしている。この図書室テーブルの約1年後に製作された竖琴の肘掛椅子の弓形トップレールとほぼ同じ形状である。また、このパーテーションは木目から判断して、オーク無垢材にマホガニー無垢材を、木目方向を合わせて接いでいる。奥にはオーク材を用い、手前には弓形のマホガニー材を用いている。そして手の汚れが付着することを考慮して手前のマホガニー材だけに塗装を施している。木目は垂直方向になっている。木材の伸縮方向を考慮すると正しい使い方である。

10) 引出 (Drawers)

ありぐみ つ

(1) 蟻組接ぎ (Dovetail Joints) (図 29、図 30、図 31)

普通の蟻組接ぎ (Through-dovetail) は、鳩尾の断面も溝の断面も表面に現われる接合の仕方である。断面が露出しても構わない箇所^{ありぐみ}に用いられる。この図書室テーブルでは側板と向板が普通の蟻組接ぎで接合されている。(図 31) 包み蟻組接ぎ (Single Lapped Dovetail) は、鳩尾の断面は見えるが、溝の断面が表面に露出しない接合の方法である。



図 29 中央部分の引出前板と側板の包み蟻組接ぎ



図 30 扉内部の引出前板と側板の包み蟻組接ぎ

例えば、引出前板と側板との接合に用いられる。この図書室テーブルでも引出前板と側板は包み蟻組接ぎで接合されている。(図 29、図 30) 元々蟻組はノミや鋸による手加工であった。また鳩尾の位置を記した引っ掻き傷のような線が見られこともある。(図 29、図 30) これは箱物職人が刻みの位置を測って記したものである。⁽¹⁸²⁾

尚、これらの鳩尾部分は非常に小さい。少しでも振れたら欠けてしまいそうである。このような鳩尾の大きさや間隔などに工房の指紋が現われると論者は考える。

(2) 底板と側板との取り合わせ (Side & Bottom Boards) (図 31)



図 31 引出側板と向板の蟻組接ぎ

底板は前板と両側板に彫られた溝に裏から挿入されている。オーク無垢材の空気中の湿度変化による伸縮を考慮して、向板には固定されていない。問題はこの溝の位置である。側板がほんの数ミリしか残されない位置に彫ってある。引出の中に何か重たいものを入れれば割れてしまいそうなほどの厚みである。このように引出の厚みぎりぎりいっぱい底板を仕込むことも、チップendale工房における箱物製作上の特徴のひとつである。

11) 甲板の黒色革張り (Desk Top with Black Leather)

図書室テーブルの甲板は黒色の革張りになっている。チップendaleの納品明細書にも「黒色の革で覆われた甲板」と記載されている。残念ながらこれが羊の革なのか、山羊の革なのか、牛の革なのかについての記述は見られない。また甲板はとても大きいため、黒色の革も1枚ものではない。何枚かの革を綺麗に繋ぎ合わせてある。

2 肘掛椅子の材料と製作技術 (Materials and Techniques applied for the Armchairs)

1) 木材：マホガニー (Mahogany)

肘掛椅子のフレームに関しては、彫刻師が別途彫刻した部材を含めて、すべてマホガニーの無垢材で製作されている。(但し座枠に落とされた座自体の枠組材を除く。)

残念ながら、図書室テーブルと同様、チップendaleの納品明細書には「図書室用のマホガニー材の肘掛椅子6脚」との記述があるだけでマホガニー材の産地までは記載されていない。ジョン・リネル工房で製作されたオスタリー・パーク・ハウス、イーティング・ルームの竖琴の椅子(1767年)に使用されていたマホガニー材はキューバ産のものであった。そこでチップendale工房で製作されたこの椅子の木材も、その硬さ故に椅子用に適

していたキューバ産マホガニー材であった可能性がある。

2) 構造・組立方法 (Structure)

(1) 柄^{ほぞ}穴と柄^{ほぞ} (Mortise and tenon)

椅子のフレームを組み立てる場合には通常、柄^{ほぞ}穴 (Mortise) に柄^{ほぞ} (Tenon) を差し込む方法が採られる。この柄組には様々な種類がある。⁽¹⁸³⁾

この肘掛椅子のフレームは、後脚から延びた左右の背柱、笠木、竖琴の背もたれと台座、座枳（後面、側面×2、正面）、左右の前脚、四隅の補強材で構成されている。背柱と笠木、背柱と座枳、前脚と座枳、笠木と竖琴の背もたれ、竖琴と台座、台座と座枳後面、肘掛と背柱、肘掛と肘受、肘受と座枳は、それぞれ柄組で固定されている。(図 47)

(2) 隅補強材 (Corner Blocks) (図 32、図 33)



図 32 座枳



図 33 隅補強材

コーナブロック（隅補強材：Corner Blocks）は、主に椅子や長椅子の座枳の四隅に接着、ビス止め、もしくは両方で固定される。座枳自体と柄組された前後の脚に強度を与えることを目的としている。形状は三角形、長方形、波形のものがある。⁽¹⁸⁴⁾

この肘掛椅子の前脚が座枳に接合されている箇所を観察すると、やや大きな前脚の端部に座枳正面と座枳側面が柄組によって固定されている。留めを切ってある部分は、後付けされた突起部材である。そして隅補強材が座枳から飛び出た前脚上端部を包み込むように押さえている。この隅補強材は波形である。また、取り外し式の座の荷重を受ける部材としても機能している。

3) 突起部材 (Mouldings) と彫刻 (Carvings) (図 34、図 35、図 36、図 37、図 38)

図書室テーブルの場合と同様、彫刻は外注先の彫刻師たちが施したものである。この肘掛椅子のフレームは、先ず木取された部材に柄と柄穴加工を施し、仮組立を経て、彫刻師



図34 座枠の突起部材とフリーズ部分の彫刻板

のところに送られた。そして後脚、前脚、笠木、背もたれに彫刻がなされたと考えられる。

座枠の上面と下面には突起部材が練り付けられている。特に上面には側面から練り付けられた部材とそれに被せて上面から練り付けられた部材との2種類がある。また、座枠フリーズ部分の正面と両側面には、パテラと上下ハスクが彫刻された板が練り付けられている。更に脚部には楕円形のパテラの上にもう1本突起部材が巻かれている。(図34、図35、図36)

背もたれの豎琴のモチーフは1枚のマホガニー無垢材を切り抜いて製作したものである。背もたれ部分を後側から眺めてみると、豎琴の左右2本のフレーム付根部分に木目方向のひび割れがあることが確認される。こ

の割れは正面まで達している。(図37)

この肘掛椅子は後脚まで綺麗に彫刻されている。チッペンデルの「指導書」に描かれたほぼ全部の椅子の後脚には装飾がない。ブロケット・ホールに納品された豎琴の肘掛椅子の後脚がその形状である。(図44) しかしチッペンデルは、ノステル・プライオリの図書室に納めた肘掛椅子の後脚まで前脚と同等の彫刻を施した。このことは特筆に値する。座枠のフリーズ部分に施したパテラと上下ハスクの装飾モチーフに負けないように4本脚すべてに彫刻を施すことにしたのであろうか。それとも図書室テーブルに向かって使用



図35 下側から見た座枠正面と側面と前脚の接合部分



図36 下側から見た座枠後面と側面と後脚の接合部分

するので、後脚にも彫刻が必要と判断したのだろうか。しかし背もたれの後面や座枠の後面には彫刻は一切施されていない。(図 38)



図 37 背もたれの竖琴の裏側



図 38 竖琴の肘掛椅子の裏側

4) 座の緑色の馬毛繊維と詰物 (Green Hair Cloths)

1768 年 1 月 20 日発送の納品明細書には「緑色の馬毛織物で覆われた座」と書かれているが、現存品は何回か張り替えられたためオリジナルの張り生地や元々のウエビングテープは残っていない。そこで今回は特に調査を行わなかった。この座は座枠に落とす方式になっていて、座自体の枠にウエビングテープが張られ、麻布を敷いた上に馬毛の詰物をして、さらに緑色に染織された馬毛の織物で覆われていた。馬毛の詰物を示すものとして、チップエンデル工房から納品されたと考えられているパーラーチェア (Palour Chairs) の張替前の姿がある。論者が調査に訪れた 2 日目に、専属の椅子張り職人が修復のために集荷に来ていた。この写真は集荷される直前に撮らせていただいたものである。(図 51)

5) その他—接着剤、塗装、ネジ

図書室テーブルの場合と同じく、接着剤には動物性接着剤の^{にかわ}膠が使用されていたものと考えられる。実際に着席することは許可されなかったが、撮影のために椅子のフレームを若干持ち上げて角度を微調整するなどしたところ、フレームは現在でもとてもしっかり接着されていることが感じられた。

塗装に関しても図書室テーブルと同じように英国製擬似漆が使用されたと考えられる。表面に比べて背柱や背もたれの後面の塗装は大分色褪せてきている。

この椅子でネジが使用されているのは、隅補強材を座枠に固定する箇所だけである。隅

補強材と座枠と前脚上端部は接着されていると考えられる。その強度を増すためにネジが使用されている。ところで、肘受が座枠と接合されている箇所が隅補強材を固定するネジ穴の延長線上にある。この部分のネジだけ長いものが使用されていれば、肘受の固定も補強される。果たしてこのネジの長さはどこまでなのか、今後の調査に期待したい。(図 33)

VII 関連家具との比較 (Comparison)

1 他の図書室テーブル (Other Library Tables)

1) 「指導書」第3版、第83番の図版 (Director, Revised 3rd Version, Plate No.83)

ノステル・プライオリの図書室テーブルに非常に似ている図版が、1759～62年に出版された「指導書」第3版の第83番に見られる。(図 39) この図では四隅が1/4円形に窪

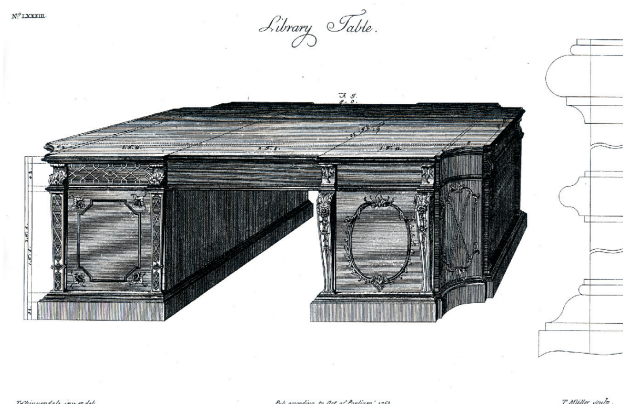


図 39 「指導書」第3版、第83番

んでいる。この図版に対応する説明文には、入隅状の扉が付いていると書かれている。この点はノステル・プライオリの図書室テーブルと違う点である。また、向かって右側の扉には先細注脚が見られるが、ライオンの頭とハスクではなく、左右非線対称の写実的なバラの花が見られる。また、扉中央部分の彫刻はロココ風のカトーシュである。これに対して、ノステル・プライオリの図書

室テーブルの扉中央部に施された彫刻は、綺麗な線対称のハスクの花輪飾りになっている。チッペンデルはこの「指導書」のデザインを使いながら、自在に装飾モチーフを変更していったことがわかる。

2) ヘアウッド・ハウスの図書室テーブル (Harewood House Library Table)

チッペンデル工房からヘアウッド・ハウスの図書室に納められた図書室テーブルは現在テンプル・ニューサムに展示されている。(図 40) この図書室テーブルは1771年頃に製作されたものと考えられている。1772年末までの納品明細書は現存していないが、「執事の日記帳」には1772年4月18日から25日まで、チッペンデルの現場職人が図書室テーブルとスツールのためにカバーを作っていたとの記述がある。そこで、その少し前に工房から納品されたものと考えられている。⁽¹⁸⁵⁾ この図書室テーブルは英国新古典様式の写実的突板寄木張り (Marquetry) の代表的な作品である。



図 40 ヘアウッド・ハウス図書室テーブル



図 41 ヘアウッド・ハウス図書室テーブルの側面



図 42 ヘアウッド・ハウス図書室テーブルの袖箱

この図書室テーブルも3つの部分に分かれる。ノステル・プライオリの図書室テーブルでは甲板部分に付属している最上段の引出は扉の中にあったが、この図書室テーブルでは最上段の引出はすべて露出している。そしてこの引出部分の全周囲をパテラと上下向きハスクを交互にあしらった写实的突板寄木張りが装飾している。扉には壺とアンセミオン、袖箱妻手側板にはハスクの花輪飾りと曲がった葉飾りの写

实的突板寄木張りが見られる。残念ながら扉の表面に練り付けられた突板は下地材が動いたために割れている。また200年以上の露出によって突板が色褪せてきている。(図42)

木彫に代わって、金メッキされた真鍮装飾金具が非常に上品に使用されている。袖箱の妻手側板中央には特大のパテラが見られる。(図41) 袖箱の扉にはパテラと羊の頭とハスクがある先細柱脚、アンセミオン、四隅のパテラ、ギロシュの飾り縁、数珠模様などの金メッキされた真鍮装飾金具が見られる。(図43) 引出把手もハスクをあしらった金メッキされた真鍮装飾金具である。

突板張りにしても金メッキ真鍮装飾金具にしても、実に様々な新古典様式の装飾モチーフが正確に表現されている。確かにチップendale工場の完成した新古典様式の家具である。

2 他の豎琴の椅子 (Other Lyre-back Chairs)

1) ブロケット・ホールの豎琴の肘掛椅子 (Brockett Hall) (図44、図45、図46)



図43 ヘアウッド・ハウス図書室テーブルの金メッキ真鍮装飾金具



図44 ブロケット・ホール図書室の豎琴の肘掛椅子

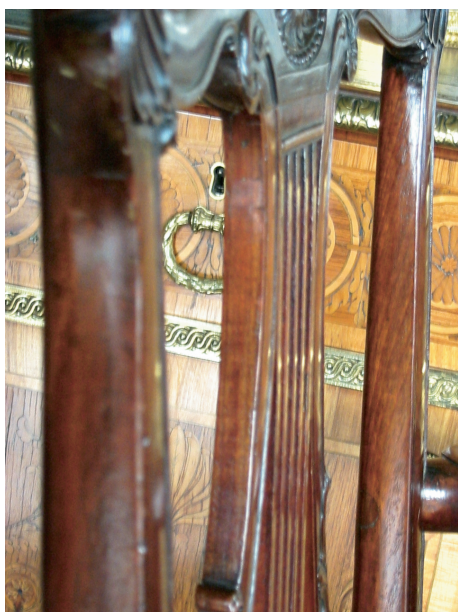


図45 ブロケット・ホール肘掛椅子の背もたれの豎琴側面

この肘掛椅子は1773年頃、チッペンデル工房から第1代メルボルン侯爵のブロケット・ホール図書室に納品された6脚の内の1脚である。現在チッペンデル学会が所有し、テンプル・ニューサムに展示されている。豎琴の台座部分の装飾からアカンサスやハスクが取り除かれて若干簡素になっているが、背柱と背もたれのデザインはノステル・プライオリの肘掛椅子とほぼ同じである。また、背もたれの豎琴のモチーフに関しては、木目が積層合板のような印象を与えるが、ノステル・プライオリ図書室のものと同じく単板無垢の透かし彫りになっている。

大きな違いは前脚のデザインと肘掛と肘受のデザインである。また後脚は「指導書」のデザインに戻っ



図 46 ブロケット・ホール肘掛椅子の豎琴の台座裏側



図 47 ノステル・プライオリ肘掛椅子の豎琴の台座裏側

ている。前脚は先細で全体的に溝彫りされたデザインになっている。踝^{くるぶし}部分に蓮の葉 (Lotus) があしらわれている。爪先部分は平たいブロック状になっているが、あまり美しいとは言えない。肘掛から肘受にかけて見られる溝彫りはとても簡素なものに変わり、洗練された新古典様式のデザインになっている。残念ながら座面は修復されたものである。尚、裏面から確認すると、背もたれが座枠後面に直接差し込まれる構造になっている。つまり豎琴の台座部分は突起部材として巻き付いているだけである。背もたれとしての強度は増すであろうが、ノステル・プライオリの肘掛椅子と比較すると、仕上がりの品質に問題があるのではないだろうか。(図 47)

2) オスタリー・パーク・ハウス、イーティング・ルームの豎琴の椅子 (Osterley Park)

ノステル・プライオリ図書室の豎琴の肘掛椅子を、アダムがデザインし、ジョン・リネル工房が製作したオスタリー・パーク・ハウス、イーティング・ルームの豎琴の椅子 (1767 年) と比較すると多くの相違点があり大変興味深い。⁽¹⁸⁶⁾

デザイン上の相違点は多々見られる。アダムはフランス、イタリアと大旅行を経験したので、古典様式の装飾モチーフに関して厳しい規則を設けていた。しかし 1767～68 年のチッペンデルは新古典様式を自身の自由な発想を交えて追いかけていた印象がある。

製作技術の面での大きな違いは、背もたれの豎琴がリネル工房の椅子では 3 層の積層合板で作られているのに対して、チッペンデル工房の肘掛椅子では単板の無垢材で作られている点である。デザイン上はオスタリーの豎琴の方がより曲線的で繊細である。3 層の積層合板でなければ完全に割れていただろう。デザイン的にノステルの豎琴は比較的簡素である。ここでチッペンデルは 3 層の積層合板ではなく単板無垢材を用いた。すでにシノワズリー様式のコーヒーテーブルの天板を囲む透かし彫りを 3 層の積層合板で製作していたのであるから、チッペンデル工房に技術的な遅れがあったとは言い難い。チッペンデルはそれまでの椅子製作の経験から、背もたれには単板無垢材で大丈夫と判断し

たのだろう。逆に単板無垢材でも割れないようにデザインを調整したかも知れない。この場合、アダムの繊細なデザインを実現するために、ジョン・リネルが技術の粋を集めて果敢に挑戦した結果、3層の積層合板の背もたれが生まれたと考えるべきではないだろうか。

リネルとチッペンデールの椅子の後脚に関する扱い方はとても違う。これらの椅子のスケッチと実測をした結果から判ったことであるが、壁を背にしてリネルの椅子を配置した場合、後脚の爪先が巾木に接しても笠木は壁に接しない。つまり背もたれは直立であり、傾斜角度は浅い。それに引き換えチッペンデールの椅子では、後脚の爪先が巾木に接する前に笠木が背後の壁に接してしまう。つまり背もたれはかなり傾斜している。この図書室の肘掛椅子は壁を背にして配置するよりも図書室テーブルに向かって使用することが主な目的であったので、座り心地を最優先に考えたのであろう。

3 肖像画に描かれた家具との比較 (Furniture drawn in the Conversation-piece)

1) 図書室テーブル (Library Table) (図 48)

ハミルトンは背景の室内を2倍の大きさに描いたが、この図書室テーブルについてはほぼ正確に描いている。しかし、それでも現物と異なる点が幾つかある。例えばライオンの爪の部分の詳細を観察すると、一つの先細柱脚の脚元に後脚が2本あることが判る。ま



図 48 肖像画の図書室テーブルの詳細

たライオンの顔の直下には前脚が2本ある。つまり先細柱脚に一頭分のライオンが描かれている。これは画家が現場ではデッサンだけして仕上げを自分の工房で行ったからではないだろうか。すなわちデッサンを基に油彩画を仕上げる間に想像力を逞しくしたと思われる。このことが示すように家具史研究にとって絵画資料は有用性とともに限界も併せもっている。

2) 布で覆われた肘無椅子：パーラーチェア (Parlour Chair) (図 49、図 50、図 51)

ノステル・プライオリのチッペンデールの古文書によると、この肖像画に描かれた簡素な脚をした椅子は、パーラーチェア (使用人の食堂用の椅子) として20本納品されている。最初は1766年6月23日に10本発送され、同年10月9日に10本追加発送されている。



図 49 肖像画のパラーチェアの詳細



図 50 パラーチェアの内の 1 脚

肖像画のデッサンが描かれたのは、1767 年 6～7 月に図書室デスクが納品されてから、1768 年 1 月末に 6 脚の竖琴の肘掛椅子が納品されるまでの間であったと考えられる。サー・ローランドはその時点ですでに納品されていたパラーチェアの 1 脚を取ってこの図書室テーブルの椅子として仮に使っていたと考えられる。この肖像画に描かれた椅子の脚先の縁には溝彫りが見られる。(図 49)

しかし不思議なことに、今回の調査では確かにパラーチェアは 20 本確認できたが、脚部の太さの違い、縁の溝彫りの有無、座枠隅補強材の有無から 4 種類に区分された。溝彫りが有るものでは、太い脚 (45 × 47mm) のものが 5 本、細い脚 (43 × 40mm) のものが 4 本あった。いずれも座枠の隅補強材が入っていた。溝彫りが無いものでは、太い脚 (45 × 45mm) のものが 6 本で隅補強材が入っていなかった。溝



図 51 修復前のパラーチェア

彫りが無い細い脚（40×38mm）のものは5本で隅補強材が入っていた。肖像画に描かれた椅子の脚の縁に溝が彫られていることから考えて、当初チッペンデル工房から納品されたものは、現存する溝がある太い脚か細い脚のどちらかであり、その他は長い年月の間に脚が擦り減ったり、壊れたりした為に適宜補充されたものではないかと考えられる。

3) ペDESTAL (Pedestal) (図8)

ヴィーナスの胸像はペDESTALという台座の上に置かれている。ギルバートによるとノステル・プライオリの古文書には、「図書室用ペDESTAL 2つ」と記述された日付が入っていないメモがある。このメモは1770年頃らしいが、ハミルトンの請求書から、この肖像画は1769年には確かに仕上がっていたことが判っている。そこでメモの日付の推測が間違っているのか、それとも肖像画に描かれたペDESTALは他のものなのか、明らかではない。アダムがデザインし、2代ローズが施工した天井の漆喰細工には、新古典様式の代表的な装飾モチーフである羊の頭がある。この肖像画に描かれたペDESTALの四隅にも同じような羊の頭が見られる。

4) 三美神 (Three Graces) (図8)

この絵画をよく観察すると「三美神」を見つけることができる。一番目は画面左端のペDESTALの上に置かれた胸像である。二番目は椅子の座の上に置かれて、サー・ローランドの右手が支えている、この胸像のデッサン画である。そして三番目はサビーヌ・ウィン令夫人自身である。当時最新のアダムのデザインによって完成した図書室の中央に置かれた図書室テーブルの前に立つサー・ローランドと令夫人は、アダム、ツッキ、ローズ、チッペンデルの作品を誇りに思っていたに違いない。そしてサー・ローランドは最愛の令夫人を天上の美に^{なぞら}準えたのである。このような最高の室内装飾に囲まれ、美しい最愛の妻に恵まれ、幸せの頂点であったサー・ローランドの姿をこの肖像画は描き出している。

VIII おわりに (Conclusion)

1766年末には完成していたチッペンデル工房製のノステル・プライオリの図書室テーブルは、ハスクやギロシュなどの新古典様式の装飾モチーフを取り入れてはいるが、ロココ様式のロカイユの引出把手を持ち、全体としては英国パラディオ様式の特徴をもっている。しかしチッペンデルは、アダムによって新たに英国にもたらされた新古典様式の特徴を直ちに吸収した。そして1767年末から1768年始めには、ノステル・プライオリ図書室の室内装飾モチーフを取り入れた豎琴の肘掛椅子をデザインして製作した。この1767年にチッペンデルはロココ様式を離れて、家具デザインを新古典様式へと大きく

シフトさせた。その意味で、ノステル・プライオリの図書室テーブルと豎琴の肘掛椅子および関連の古文書は、英国家具史を研究する上で大変貴重な歴史的資料のひとつである。

ノステル・プライオリでの調査中、ナショナル・トラストの朝のスタッフ・ミーティングに参加させていただき、文化遺産を保全管理する人々の熱い思いを感じることができた。

この図書室テーブルと豎琴の肘掛椅子は、1766年1月に共同経営者のレニーを亡くしてから1771年にヘイグを新しい共同経営者として迎えるまでのチップendale工房が非常に苦しい時期の作品である。このような苦境の中にありながら、200年以上の歳月が流れてもなお立派に存在する一流の家具を製作したことは高く評価される。今回の物質的な調査（Materialistic Research）によってチップendale工房の家具製作技術がより明らかになった。またチップendale自身の家具デザインに対する考え方や装飾モチーフの用い方に関して認識を深めることができた。確かに工房の指紋がこれらの家具に刻まれている。

今回の調査では、ノステル・プライオリの近くに住む友人の母上のお宅にホームステイをさせていただいた。そして毎日これらのカントリーハウスにレンタカーで通った。ノステル・プライオリからヘアウッド・ハウスまで現代では自動車ですら1時間強の距離である。しかし18世紀中葉にチップendaleが四輪馬車や荷馬車に乗ってロンドンから下り、これらの街道を歩いて依頼主たちのお宅を訪問し、実際に室内を採寸し、数々の打合せを行ったことを想像すると、本当に多くの苦勞の末に製作された家具であったとの深い感銘を覚えた。そして今回の研究を通して、芸術文化の真の後援（Patronage）とは何かという点についても大変思慮深い考察を得ることができた。

本文注・引用

第1章

- (1) BRACKETT (1924)
- (2) COLERIDGE (1968)
- (3) BOYNTON & GOODISON (May 1969); BOYNTON & GOODISON (June 1969)
- (4) GILBERT (1978 Studio Vista)
- (5) GILBERT (1978 Artline)
- (6) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.175 左下より 6 行目
- (7) GILBERT (1990)

第2章

- (8) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, pp.49-51 より抜粋
- (9) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, pp.50 右下 -51 左上
- (10) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, p.51 より抜粋
- (11) FLEMING, HONOUR & PEVSNER (1980) p.234 より抜粋
- (12) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, p.53 より抜粋
- (13) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, p.54 より抜粋
- (14) 新井竜治 (2004) pp.48-49
- (15) HARRIS (2001) p.199 左下
- (16) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, p.54-55 より抜粋

- (17) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, p.55 左中段
- (18) HARRIS (2001)
- (19) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, pp.55-56 より抜粋
- (20) JERVIS (1984) p.267; MURRAY (1989) pp.217-218
- (21) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, p.56 左下
- (22) Harewood House に 2 代ローズのオリジナル・スケッチブックが保管されている
- (23) JERVIS (1984) p.419
- (24) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.58
- (25) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, pp.59-60
- (26) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.166-167
- (27) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.167, GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.59
- (28) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.167, シモンド (Symond) の意見 ;
GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, pp.59, クリスティーズの目録との比較
- (29) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.180, TC to RW, 3 January 1772
- (30) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.191
- (31) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.192
- (32) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.193-194
- (33) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 3 March 1769
- (34) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.193, Receipt, 13 June 1772
- (35) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.193, Receipt, 1 October 1772
- (36) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.193, 本稿第 2 章第 4 節第 3 項 (01) 参照
- (37) ① GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.176, RW to TC (copy), 12 August 1767;
② GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.176-7, RW to TC (copy), 27 September 1767;
③ GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.178-9, RW to TC (copy), 4 October 1770
- (38) BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, pp.164-165; GILBERT & LOMAX (2000) p.12
- (39) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.176-7, RW to TC (copy), 27 September 1767
- (40) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.177, TC to RW, 1 October 1767
- (41) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.177, TC to RW, 11 January 1768
- (42) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.177, TC to RW, 11 January 1768
- (43) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.191, 1770 年 12 月 22 日請求書 ;
pp. 193-194, 1771 年 12 月 7 日の請求書による
- (44) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 3 February 1769
- (45) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 3 March 1769
- (46) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.191, 1770 年 12 月 22 日請求書 ;
pp. 193-194, 1771 年 12 月 7 日の請求書による
- (47) CHIPPENDALE SOCIETY (2000) p.24; GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.57
- (48) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 4 October 1769
- (49) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 4 October 1769, Annotation
- (50) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 18 October 1769
- (51) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 18 October 1769 に解説あり
- (52) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 31 October 1769, "our letter of 28th"
- (53) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 31 October 1769
- (54) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 31 October 1769, Annotation
- (55) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 5 July 1770

- (56) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 5 July 1770, Annotation
- (57) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 25 September 1770
- (58) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.178-9, RW to TC (copy), 4 October 1770
- (59) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 20 November 1770, "Your letter of 15th"
- (60) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 20 November 1770
- (61) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.225, TC to EK, 15 October 1770, "Sir Edward Knachbull remitted Chippendale £ 150 on 20 October 1770"; p.234, "withdrawn on 2 November 1770"
- (62) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.191, 1770 年 12 月 22 日請求書
- (63) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.193-194, 1771 年 12 月 7 日の請求書
- (64) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.193, ND (no date)
- (65) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.180, TC to RW, 25 January 1772, "If I over run the time I am obliged to pay the Interest" ; p.234, Sir Edward Knachbull's Pocket Notebook, "6 January 1772, paid Chippendale the half year Interest on the £ 100 who is paid all in full, £ 2.2.0"
- (66) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.179, CH to RW, 17 April 1771; TCJr to RW, 27 April 1771; CH to RW, 10 July 1771; CH to RW, 23 October 1771; CH to RW, 14 December 1771
- (67) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.191-192
- (68) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.193-194, 1771 年 12 月 7 日の請求書による
- (69) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.180, TC to RW, 3 January 1772
- (70) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.180, TC to RW, 25 January 1772
- (71) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.180, TC to RW, 25 January 1772, Annotation
- (72) 本稿第 2 章第 4 節第 2 項参照
- (73) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.56 & p 58, Bill 27 June 1772 for Sefferine Nelson
- (74) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, pp.59-60, TC to RW, 21 June 1774
- (75) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.59, TC to RW, 5 May 1774
- (76) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.60, TC to RW, 30 June 1774
- (77) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.59 中段
- (78) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.180, TH to TT, 10 July 1781
- (79) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.192-193, Accounts, 6 April 1785
- (80) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.180, HC to Leadbeater, 16 April 1785
- (81) HARRIS (2001) p.211
- (82) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.206-210, Chippendale Accounts at Harewood
- (83) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.210-219, Day Work Book at Harewood
- (84) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.219-220, Steward's Letter Book at Harewood
- (85) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.219, Steward's Letter, 13 February 1771
- (86) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.219-220, Steward's Letter, 21 May 1777
- (87) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.196 右上
- (88) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.225-227, Letters, pp.227-234, Accounts
- (89) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.223 左下から右上にかけて
- (90) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.225, EK to TC (draft), January 1771
- (91) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.225, EK to TC (draft), January 1771
- (92) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.227, EK to TC (draft or copy), no date, probably mid-August 1778, written on Chippendale's letter 6 August 1778

- (93) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.234, Accounts, 23 December 1778
- (94) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.234, Pocket Notebook, 14 October 1779
- (95) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.227, CH & Co. to EK, 15 October 1779
- (96) RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory and the Winns, p.63 より抜粋

第3章

- (97) トーマス・チッペンデル親子の生涯と仕事は以下のギルバートの著作に詳しく述べられている。第3章の記述の大部分はこれらの著作からの抜粋である。BEARD & GILBERT (1986); GILBERT & LOMAX (2000); GILBERT (1978 SV)
- (98) GILBERT & LOMAX (2000) p.10; BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.164 左下 ; GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.55 中段
- (99) GILBERT & LOMAX (2000) pp.10-11; BEARD&GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.164 右上
- (100) JERVIS (1984) pp.137-138
- (101) GILBERT & LOMAX (2000) p.11-12; BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.164 右下
- (102) BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.165 左上
- (103) GILBERT & LOMAX (2000) p.12; BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.165 左上
- (104) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.175, TCJr to RW, 5 August 1767
- (105) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.175, TCJr to RW, 27 April 1771
- (106) GILBERT & LOMAX (2000) p.12 右下
- (107) GILBERT & LOMAX (2000) p.12 右下 ; BEARD&GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.165 左中
- (108) BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.168 右上
- (109) BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.168 右中
- (110) GILBERT & LOMAX (2000) p.13 左中
- (111) CHIPPENDALE SOCIETY (2000) p.8 と GILBERT & LOMAX (2000) p.14 に「指導書」初版の表紙が見られる。
- (112) GILBERT & LOMAX (2000) p.14 左中
- (113) GILBERT & LOMAX (2000) p.14 左中 ; JERVIS (1984) p.111 右上
- (114) CHIPPENDALE (1762) 「指導書」 第3版は Dover Pub. から復刻されている。
- (115) BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.165 右下 -166 左上
- (116) GILBERT & LOMAX (2000) p.14 右中
- (117) BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.169 右上
- (118) GILBERT & LOMAX (2000) p.11 中下
- (119) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.177, TC to RW, 1 October 1767
- (120) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, p.57, TC to RW, 30 October 1767
- (121) HAYWARD & KIRKHAM (1980) pp.168-180, Inventory 28 Berkley Square, 1763; Stock in Trade & C, p.171, “In the Carving Shop”, “In the Gilding Shop”
- (122) 本稿第7章第1節第2項参照
- (123) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. II, p.6, The Only Recorded Trade Card
- (124) GILBERT & LOMAX (2000) p.11 右上
- (125) GILBERT & LOMAX (2000) p.12 左上
- (126) GILBERT & LOMAX (2000) p.12 左中
- (127) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, Part III, Chippendale’s Patrons & Furniture, Index, pp.6-7, Commission in chronological order
- (128) GILBERT & LOMAX (2000) p.15 左中 ; BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.165 左中
- (129) GILBERT & LOMAX (2000) p.17 左下

- (130) JERVIS (1984) p112 左上
- (131) Distract from Country Life Website News, 7 September 2004, "Dumfries House for Sale: The Marquess of Bute has decided to put his country house in Ayrshire up for sale, prompting speculation over what will happen to the property which would be an impressive acquisition for any buyer. The Marquess said he has chosen to sell the property in order to concentrate on his estate on Bute, saying that he never lived in Dumfries House, and thought of it more as his grandmother's home. The potential sale has raised eyebrows from collectors who would rather not see the famous collection of Chippendale furniture scattered and the house sold off in lots, as the property and its contents together are a unique holding. The National Trust for Scotland has been invited to raise the funds required to secure the property. However, it believes it will need help from other bodies including the Scottish Executive in order to afford the expected high price. The Chief Executive of the Trust told the Telegraph yesterday: 'The Trust's main concern is that the magnificent contents, including the Chippendale furniture, may be split up and sold piecemeal. 'For an entire collection of this quality to survive in tact is extremely rare. It is the totality of the house with its original furniture in situ that is of such international importance.' Should the Trust lose out, the house is due to go onto the market in September. FPD Savills is advising on the sale. Guy Galbraith, from Savills' Edinburgh office, said today that he had been to the house as part of his advisory role. He lost no time in saying it was 'one of the most exceptional houses in Scotland.' FPD Savills"
- (132) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, pp.158-160, Aske Hall, Yorkshire and 19 Arlington Street, London (1763-6), Sir Lawrence Dundas, Bt, Chippendale's Bill, Receipts and Related Documentation
- (133) BEARD & GILBERT (1986) Dic. of Eng. Furniture, p.165 右中
- 第4章
- (134) HARRIS (2001) P200, fig.293, James Adam, 'Sketch of the sides of the Library with the different Colours marked on it', sent to Sir Rowland Winn with a covering letter, 1767 (Nostell Priory, The National Trust)
- (135) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.175, TC to RW, 27 December 1766
- (136) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.175, TC to RW, 27 December 1766
- (137) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.177, TC to RW, 1 October 1767, "The Gilt border was sent to the Inn on the 21st of Sept and would be at Nostell on the 28th."
- (138) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.180, CH to RW, 14 December 1771; p.227, CH & Co. to EK, 15 October 1779
- (139) GILBERT (1990) Furniture History Vol. 26, pp.56-57, Henry Allen to RW, 6 July 1767 (excerpt), "...and also a number of Sham Books which was sent by the Flye on the 30th of June last, which as yet I can hear nothing of"; GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.185, Accounts, 30 June 1767, "To wood & making 81 sham books for the doors of the Library / 6, £ 2-0- 6d"
- (140) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.178, TC to RW, 18 October 1769, "I hope that you have received ye borders & c long ago as they was Sent of a fortnight ago"; p.189, Accounts, 2 October 1769, "To 253 feet of neat carvd border done in Green and Gold for one room 1/8, £ 21-1-8d; To 337 feet of ditto for another room 1/8, £ 28-1-8d"
- (141) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.183, Accounts, 23 June 1766
- (142) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.185, Accounts, 30 June 1767
- (143) GILBERT & LOMAX (2000) p.12 右上
- (144) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.177, TC to RW, 11 January 1768
- (145) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.186, Accounts, 22 January 1768

- (146) CHIPPENDALE SOCIETY (2000) p.18 左中
(147) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.185, Accounts, 4 July 1767
(148) 1971 年以前の英国旧通貨制度では、1 ポンド (pound) = 20 シリング (shillings) = 240 ペンス (pence)、すなわち 1 シリング = 12 ペンスであった。
(149) A Letter from Mr. Samuel Keeling to Miss Frances Shepheard, who later became Lady Irwin of Temple Newsam, dated 10 July 1758, prior to her marriage in August 1758 to Hon Charles Ingram, later inherited the title in 1763, preserved in Temple Newsam archives at the West Yorkshire Archive Service, Leeds (WYAS) ref: TN/C/18
(150) HAYWARD & KIRKHAM (1980) p.163, Accounts, 2nd October 1767, "To 2 mahogany elbow chairs with harp backs neatly carved, the seats stuffed in canvas with the best materials and covered with horse hair and nailed with the best princes metal nails all compleat, £ 5-10-0" ; 新井竜治 (2004) pp.65-66 参照
(151) LAING (2000) Apollo Magazine, April 2000, pp.14-18
(152) 旧通貨制度の金貨 1 ギニー (guinea)=21 シリング (shillings)、ギニア産の金が由来。
(153) LAING (2000) Apollo Magazine, April 2000, pp.14-18

第5章

- (154) FLEMING & HONOUR (1989) p.813; LEWIS & DARLEY (1990) "herm" p.158; BOYCE (1985) p.294
(155) LEWIS & DARLEY (1990) "lion" & "lion mask", pp.189-190; "paw", p.229
(156) LEWIS & DARLEY (1990) "scroll", pp.272; "C-scrolls and S-scrolls", p.96; "cartouche", pp.70-71; BOYCE (1985) "scroll", p.267
(157) FLEMING & HONOUR (1989) p.407; BOYCE (1985) p.146
(158) FLEMING & HONOUR (1989) "festoon", p.303; "swag", p.796; BOYCE (1985) "festoon", p.106; "swag", p.288
(159) LEWIS & DARLEY (1990) "wreath" p.318; "ribbon", pp.257-258
(160) FLEMING & HONOUR (1989) pp.10-11; BOYCE (1985) pp.1-2
(161) FLEMING & HONOUR (1989) "patera", p.613; "rosette", p.704; LEWIS & DARLEY (1990) "patera", p.228; "rosette", p.265; BOYCE (1985) "patera", p.217; "rosette", p.257
(162) FLEMING & HONOUR (1989) p.375; BOYCE (1985) p.133
(163) LEWIS & DARLEY (1990) pp.259-260; BOYCE (1985) p.249
(164) FLEMING & HONOUR (1989) p.71; BOYCE (1985) p.25 & p.197
(165) LEWIS & DARLEY (1990) p.194; BOYCE (1985) p.184
(166) 新井竜治 (2004) 参照
(167) FLEMING & HONOUR (1989) p.321; LEWIS & DARLEY (1990) p.116 & p.178
(168) FLEMING & HONOUR (1989) p.30; LEWIS & DARLEY (1990) pp.32-33; BOYCE (1985) p.10
(169) FLEMING & HONOUR (1989) p.310; BOYCE (1985) p.109
(170) LEWIS & DARLEY (1990) p.185; BOYCE (1985) p.169
(171) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.170 左上
(172) HARRIS (2001) P200, fig.293
(173) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.185, Accounts, 30 June 1767

第6章

- (174) EDWARDS (2000) "Mahogany", pp.130-132
(175) EDWARDS (2000) "Oak", pp.148-149
(176) EDWARDS (2000) "Banding", pp.148-149
(177) EDWARDS (2000) "Adhesives", pp.2-3
(178) EDWARDS (2000) "Finish", pp.83-84; EDWARDS (1996) pp.100-108
(179) EDWARDS (2000) "Pin", pp.100-101

- (180) EDWARDS (2000) “Castors”, pp.46-48
- (181) EDWARDS (2000) “Screws”, p.191
- (182) EDWARDS (2000) “Dovetail”, pp.111-112
- (183) EDWARDS (2000) “Mortise and tenon”, pp.111-112
- (184) EDWARDS (2000) “Corner blocks”, p.69

第7章

- (185) GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.201 右下 ; p.215, Day Work Book, 18 to 25 April 1772, “making covers for the Library Table & stool”
- (186) 新井竜治 (2004) 参照

図表出典

- 図 1、図 6-38、図 47-51 新井竜治 2004 年 8 月 23・24 日撮影 (ナショナル・トラスト、ノステル・プライオリ)、Taken by Michael Ryuji Arai on 23rd & 24th August 2004 under kind permission of The National Trust, Nostell Priory
- 図 2 RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory Guide Book, Front Cover
- 図 3 The National Trust Photo Library, “Nostell Priory Library, remodelled by Adam 1766-67 with Chippendale furniture”
- 図 4 RAIKES & KNOX (2001) Nostell Priory Guide Book, Back Cover
- 図 5 GILBERT (1978 Studio Vista) vol. I, p.23
- 図 39 CHIPPENDALE (1762) pl. LXXXIII
- 図 40-46 新井竜治 2004 年 8 月 22 日撮影 (テンプル・ニューサム・ハウス、リーズ市カウンスル)、Taken by Michael Ryuji Arai on 22nd August 2004 under kind permission of The Leeds City Council, Temple Newsam House

参考文献・図表出典の短縮形一覧

- BEARD & GILBERT (1986) Geoffrey Beard and Christopher Gilbert (eds), *Dictionary of English Furniture Makers 1660-1840*, The Furniture History Society, London & W. S. Maney and Son Ltd., Leeds, 1986
- BEARD (1997) Geoffrey Beard, *Upholsterers and Interior Furnishings in England 1300-1840*, published for the Bard Graduate Center for Studies in the Decorative Arts by Yale University Press, New Heaven & London, 1997
- BOYCE (1985) Charles Boyce, *Dictionary of Furniture*, Facts On File Publications, New York & Oxford, 1985
- BOYNTON & GOODISON (May 1969) Lindsay Boynton & Nicholas Goodison, *The Furniture of Thomas Chippendale at Nostell Priory - I*, Burlington Magazine, May 1969, pp. 281-287
- BOYNTON & GOODISON (June 1969) Lindsay Boynton & Nicholas Goodison, *The Furniture of Thomas Chippendale at Nostell Priory - II*, Burlington Magazine, June 1969, pp. 351-360
- BRACKETT (1924) Oliver Brackett, *Thomas Chippendale: A study of His Life, Work and Influence*, Hodder and Stoughton Ltd., London, 1924
- C.D.EDWARDS (1993) Clive D. Edwards, *Victorian Furniture: Technology and design*, Manchester University Press, Manchester & New York, 1993
- C.D.EDWARDS (1994) Clive D. Edwards, *Twentieth-century Furniture: Materials, manufacture and markets*, Manchester University Press, Manchester & New York, 1993
- C.D.EDWARDS (1996) Clive D. Edwards, *Eighteenth-century Furniture*, Manchester University Press, Manchester & New York, 1996
- C.D.EDWARDS (2000) Clive D. Edwards, *Encyclopedia of Furniture: Material, Trade and Techniques*, Ashgate Publishing Limited, Aldershot, England & Vermont, USA,

2000

- CHIPPENDALE (1762) Thomas Chippendale, *The Gentleman & Cabinet-Maker's Director : 1762 Third Edition*, Dover Publications Inc., New York, 1966
- CHIPPENDALE SOCIETY (2000) The Chippendale Society, *The Chippendale Society: Catalogue of the Collections*, The Chippendale Society, 2000
- CHITHAM (1985) Robert Chitham, *The Classical Orders of Architecture*, The Architectural Press: London, 1985 (first published), 1986 (reprint edition)
- COLERIDGE (1968) Anthony Coleridge, *Chippendale Furniture: The Work of Thomas Chippendale and his Contemporaries in the Rococo Taste; Vile, Cobb, Langlois, Channon, Hallett, Ince and Mayhew, Lock, Johnson and others circa 1745-1765*, Faber and Faber, London, 1968
- FLEMING & HONOUR (1989) John Fleming & Hugh Honour, *The Penguin Dictionary of Decorative Arts: New Edition*, Viking Penguin Inc., New York, 1989
- FLEMING, HONOUR & PEVSNER (1980) John Fleming, Hugh Honour & Nikolaus Pevsner, *The Penguin Dictionary of Architecture*, Penguin Group, London, 1980 Third Edition
- GILBERT (1978 Leeds) Christopher Gilbert, *Furniture at Temple Newsam House and Lotherton Hall: A catalogue of the Leeds collection in two volumes, Volume I & II*, published jointly by the National Art-Collections Fund & the Leeds Art Collections Fund, 1978
- GILBERT (1978 Studio Vista) Christopher Gilbert, *The Life and Work of Thomas Chippendale in two volumes, Volume I & II*, A Studio Vista Book published by Cassell Ltd., London, 1978
- GILBERT (1978 Artline) Christopher Gilbert, *The Life and Work of Thomas Chippendale*, Artlines (UK) Ltd., Bristol, 1978
- GILBERT (1990) Christopher Gilbert, *New Light on the Furnishing of Nostell Priory*, Furniture History XXVI (Vol.26), 1990, pp53-66
- GILBERT (1996) Christopher Gilbert, *Pictorial Dictionary of Marked London Furniture 1700-1840*, The Furniture History Society, London & W. S. Maney and Son Ltd., Leeds, 1996
- GILBERT (1998 Leeds) Christopher Gilbert, *Furniture at Temple Newsam House and Lotherton Hall: A catalogue of the Leeds collection in three volumes, Volume III*, published jointly by the Leeds Art Collections Fund & W. S. Maney and Son Ltd. in association with the National Art Collections Fund, 1998
- GILBERT & LOMAX (2000) Christopher Gilbert & James Lomax, *Thomas Chippendale: Master Craftsman and Entrepreneur, in The Art of Thomas Chippendale: Master Furniture Maker (exhibition catalogue, Harewood House 2000)*, Harewood House Trust, 2000, pp10-21
- HAREWOOD (2000) Harewood House Trust, *Harewood: Yorkshire (guide book)*, Harewood House Trust, circa 2000
- HAREWOOD WEBSITE (2004) Harewood House Trust, *Thomas Chippendale at Harewood House Website*: <http://www.harewood.org/chippendale/index2.htm>, Harewood House Trust, 2004
- HARRIS (1973) Eileen Harris, *The Furniture of Robert Adam*, Academy Edition, London, 1973
- HARRIS (1994) Eileen Harris, *Osterley Park Middlesex*, The National Trust, London, 1994
- HARRIS (2001) Eileen Harris, *The Genius of Robert Adam: His Interiors*, published for the Paul Mellon Center for Studies in British Art by Yale University Press, New

- Heaven & London, 2001
- HAYWARD & KIRKHAM (1980) Helena Hayward & Pat Kirkham, *William and John Linnell: Eighteenth Century London Furniture Makers Volume I & II*, A Studio Vista Book published by Cassell Ltd., London, 1980
 - JERVIS (1984) Simon Jervis, *The Penguin Dictionary of Design and Designers*, Penguin Group, London, 1984
 - KIRKHAM (1988) Pat Kirkham, *The London Furniture Trade 1700-1870*, The Furniture History Society, London, 1988
 - LAING (2000) Alastair Laing, *Hugh Douglas Hamilton's Conversation-piece of Sir Rowland and lady Winn in the Library of Nostell Priory*, Apollo Magazine, April 2000, pp.14-18
 - LEEDS ART GALLERIES (1979) Leeds Art Galleries at Temple Newsam, *Thomas Chippendale: An exhibition to mark the bicentenary of Thomas Chippendale's death in 1779*, Leeds Art Galleries at Temple Newsam, 24 October to 25 November 1979
 - LEEDS CITY COUNCIL (1999) Leeds City Council, *Temple Newsam (guide book)*, Leeds City Council, 1999
 - LEWIS & DARLEY (1990) Philippa Lewis & Gillian Darley, *Dictionary of Ornament*, Cameron & Hollis in association with David & Charles Publishers plc., Devon, 1990
 - MACQUOID & R.EDWARDS (1983) Percy Macquoid & Ralph Edwards, *The Dictionary of English Furniture: From the Middle Age to the Late Georgian Period in three volumes, Volume I, II & III*, 1924-7 (first published by Country Life Ltd.), 1954 (second, revised & enlarged edition by R. Edwards, Country Life Ltd.), 1983 (reprinted by the Antique Collectors' Club)
 - MURRAY (1989) Peter & Linda Murray, *The Penguin Dictionary of Art and Artists: New Edition and Enlarged*, Penguin Group, London, 1989, 6th edition
 - MUSGRAVE (1966) Clifford Musgrave, *Adam and Hepplewhite and other Neo-Classical Furniture*, Faber & Faber Ltd., London, 1966
 - NOSTELL PRIORY WEBSITE (2004) The National Trust, *Nostell Priory Website*: <http://www.nationaltrust.org.uk/nostellpriory/>, The National Trust, 2004
 - PARISSIEN (2000) Steven Parissien, *Adam Style*, Phaidon Press, London, 2000 Reprinted paperback edition
 - R.EDWARDS (1969) Ralph Edwards, *The Shorter Dictionary of English Furniture*, published for Country Life Books by the Hamlyn Publishing Group Ltd., London, New York, Sydney & Toronto, 1969 Third Impression
 - R.EDWARDS & JOURDAIN (1946) Ralph Edwards and Margaret Jourdain, *Georgian Cabinet-makers*, Country Life Ltd.: London, 1944 (first published), 1946 (revised edition)
 - RAIKES & KNOX (2001) Sophie Raikes & Tim Knox, *Nostell Priory (guide book)*, The National Trust, London, 2001
 - SNODIN & STYLES (2001) Michael Snodin & John Styles, *Design & The Decorative Arts: Britain 1500-1900*, V&A Publications, London, 2001
 - TEMPLE NEWSAM WEBSITE (2004) Leeds City Council, *Temple Newsam Website*: <http://www.leeds.gov.uk/templenewsam/>, Leeds City Council, 2004
 - THORNTON (1985) Peter Thornton, *Authentic Dé cor: The Domestic Interior 1620-1920*, Weidenfeld & Nicolson, London, 1985
 - 新井竜治 (2004) 新井竜治, オスタリー・パーク・ハウス、イーティング・ルームの豎琴の椅子, 共栄学園短期大学研究紀要 2004 第 20 号, 2004 年 3 月発行, pp.41-74
 - 田中亮三・増田彰久 (1997) 田中亮三 (文)・増田彰久 (写真), 英国貴族の邸宅: Robert Adam's Country House, 株式会社小学館, 1997 年 2 月 10 日初版

- 田中亮三・増田彰久（1999） 田中亮三（文）・増田彰久（写真），図説英国貴族の城館：
カントリー・ハウスのすべて，河出書房新刊，1999年1月25日初版